苧環型蛇婿入譚の祖母嶽伝説と韓国
－鉄文化の視点から－

金賛會*
kimch@apu.ac.jp

〈目次〉

1. はじめに
2. 大分の祖母嶽伝説―尾形三郎惟義の始祖―
3. 祖母嶽伝説の諸伝承
4. 祖母山信仰―嫗嶽(祖母嶽)明神と豊玉姫命、彦五瀬命
5. 苧環型蛇聟入譚の祖母嶽伝説と卵生型始祖神話
6. 韓国の苧環型蛇聟入譚の夜来者説話―甄萱伝説の中国説話との関わり―
7. 韓国の苧環型蛇聟入譚・夜来者説話の諸伝承と伝承様相
8. 緒方三郎惟栄始祖神話と緒方三社の原尻滝の川越し祭
9. おわりに

主題語: 苧環型(Odamakigata), 蛇聟入り(Reach a snake in bridegrooms), 祖母嶽伝説(Sobotake legend), 卵生神話(Oviparous myth), 緒方三郎惟栄(Ogatasaburokoreyoshi)

1. はじめに

大分県豊後大野市には豊後国武将・緒方三郎惟栄の始祖誕生を叙述する「祖母嶽伝説」が存在するが、この伝説は、『古事記』に見える苧環型蛇聟入譚に属する三輪山神婚説話と類似するもので、韓国の古代国の一つ、後百済国の始祖由来を叙述する「甄萱伝説」ともきわめて近似している。韓国ではこの「甄萱伝説」をはじめ、苧環型蛇聟入譚を「夜来者説話」と呼んでいる。この三輪山神婚説話については、従来諸氏によって様々な研究が行われている[1]が、この中で孫晋泰氏は、大蛇説話が日本に多く伝承する点をあげ、日本から韓国南

* 立命館アジア太平洋大学　アジア太平洋学部　教授

1) 日本側の主な論考としては、鳥居龍藏(1927)「三輪山伝説」(『鳥居龍藏全集』の第一巻『有史以前の日本』、松前健(1979)「渡来氏族としての大神氏とその伝承」『日本のなかの朝鮮文化』43号、大林太良(1984)「三輪山伝説の原義と系統」『東アジアの王権神話』弘文堂、渡辺澄夫(1981)『源平の雄　緒方三郎惟栄』第一法規出版株式会社、富来隆「大神氏の始祖惟基をあかがりの大弥太ということについて　1~3」『佐伯史談』129·130·131, 小林武一(2006)『緒方三郎惟栄と姥社・小松社』などがある。韓国側の主な論考としては、孫晋泰(1972)『朝鮮民族説話の研究』乙酉文化社、蘇在英(1969)「異類交媾考」『国語国文学』42・43

部の方に伝わり、それが江原道や咸鏡道に移動したものとする。孫晋泰氏以外のほとんどの研究者は、苧環型蛇聟入譚は中国から朝鮮半島を経て、日本に伝わったものとしている。これに対して福田晃氏は、日本の苧環型蛇聟入のすべてが古代の三輪山伝承の直系の子孫であるとは限らぬものであり、その伝来も中国から日本へ一回だけ、一経路によってのみ伝わったものではあるまい。またその話型も必ずしも一定であったとも考えられぬ」という[2]。また魯成煥氏は、「須恵器の生産が日本では四世紀末、または五世紀はじめに始まるのをみれば、これと関連の深い三輪山伝説の成立を五世紀以前の伝承と見ることができ、韓国から日本へ伝わったのは少なくとも五世紀まで遡る必要がある」と論じる[3]。

以上のように、従来学界での苧環型蛇聟入譚についての研究は、『古事記』収載の三輪山神婚説話を中心に考察が行われ、豊後や日向地方を背景にしている「祖母嶽伝説」に中心を置いて考察した論考は皆無に近いといえる。そこで本稿では、豊後国と日向国を舞台とする、『源平盛衰記』や『平家物語』収載のいわゆる、「祖母嶽伝説」に焦点をあてて検討してみたい。特にその祖母嶽伝説が隣の国・韓国ではどのように展開されているのか、豊後国や日向国の祖母嶽伝説や民間伝承の苧環型蛇聟入譚との比較を通して、両伝承の特質を鉄文化の視点から明らかにしたい。また記紀神話や『源平盛衰記』など収載の苧環型蛇聟入譚には、卵生要素が薄いものとなってあり、従来、学界では日本には卵生型氏族神話や卵生神話が縁遠いものとされてきたが、民間伝承の苧環型蛇聟入譚のなかに密かに伝承されるものであった。そこで本稿では従来学界で指摘したことのなかった日本の卵生型氏族神話の存在も苧環型蛇聟入譚を通じてあわせて論じてみたい。

合併号、崔仁鶴(1976)「韓国昔話のタイプインディックス」『韓国昔話の研究』弘文堂、同氏(1984)「火の神型昔話の比較―韓・日・沖縄の資料を中心に―」『日本昔話研究集成二』名著出版、同氏(1994)「夜来者型説話の形態(構造)」『韓国民譚の類型研究』仁荷大学出版部、張徳順(1977)「韓国の夜来者伝説と日本の三輪山伝説との比較研究」『韓国文化』3号、金和経(1987)『韓国説話の研究』嶺南大学出版部、文璨植(1993)「韓国の甄萱説話と日本の活玉依姫説話の比較研究―両説話の作品を中心に―」光州大学民族芸術研究所『論文集』巻2、徐大錫(2001)「夜来者説話の神話的性格」『韓国神話の研究』集文堂、李ジョン(2001)「夜来者説話の神話的性格と伝承に関する研究」『古典文学研究』韓国古典文学会、同氏(2008.12)「夜来者説話との関係から見た火種と童参―火の信仰に関する比較民俗学を兼ねて―」『東アジア古代学』第18輯　東アジア古代学会、権テヒョ(2008)「代々受け継がれてきた火種譚の性格と火の起源神話的面貌」『口碑文学研究』26　韓国口碑文学会、金均泰(2004)「韓中日夜来者型説話の比較研究」『比較民俗学』第26号　比較民俗学会、崔ヨンシン(2005.12)「夜来者説話研究」延世大学大学院修士学位論文、李スクキョン(2010.6)「韓日夜来者型説話比較研究」水原大学教育大学院修士学位論文　などがある。

2) 福田晃(1984)「昔話の発生と伝播」『日本昔話研究集成二』名著出版

3) 魯成煥他(1984)「韓日夜来者説話の一研究」『研究論文集』第15巻 第2号 蔚山大学、同氏(1985)「古事記三輪山伝説の一考察―韓日移動関係を中心に―」『日語日文学研究』6巻1号 韓国日語日文学会

2. 大分の祖母嶽伝説―尾形三郎惟義の始祖―

鎌倉時代の成立とされる『源平盛衰記』には、豊後武将の尾形三郎惟義(緒方三郎惟栄)の始祖由来を語る苧環型蛇聟入譚の「祖母嶽伝説」が記されている。その内容は、およそ次のようである。

(1) ① 日向国塩田というところに大々夫という徳人があり、娘が一人いた。名を花の御本と言い、とても美しかった。 **〔女主人公の名〕**

② 国中に婿になろうとするものが多かったが、大々夫は娘を秘蔵して後園に屋敷を作って住ませ、男を一切通わせなかった。 **〔女主人公の隔離〕**

(2) こうして何年か経ち、ある年の秋、寂しさを囲っている娘のところに立烏帽子に水色の狩衣の姿をし、歳は二四、五、田舎者とは思えない高貴な出で立ちの美男がどこからともなくやってきて、娘のところで様々な物語をする。男は夜毎にやってきて口説いたので、花の御本もさすが岩木ではないので、ついに心を動かした。その後も毎夜、二人の忍び合いは続いた。 **〔来訪者の姿〕**

(3) 娘は父母にこれを隠していたが、付き添い女童に見とがめられ、父母に告げられる。父母は急いで娘を呼び問いただすが、娘は恥ずかしいことなので何も言わない。母が様々に脅しすかして聞くと、娘はありのままを話した。母は娘から聞いた男の様子をただ者ではないと察し、たとえ婿にしてもよいから男をつき止めようと考える。そこで苧環と針を与え、男が帰る時、刺すように教えた。 **〔正体把握方法〕**

(4) その夜も男が訪ねて来たので、母の教え通り、男の狩衣の首上に刺して置いた。翌朝、塩田大夫は、息子や下人四、五十人を連れて糸の後をつけると、苧環の糸は、尾を越え、谷を越え、日向と豊後の境の嫗岳という山に至り、大きな穴の中に引き入れられていた。 **〔来訪者の居住地〕**

(5) ① 穴の口で立ち聞きすると、中からうめき声がし、身の毛もよだつほどであった。娘は父の教えにより穴の口で、「中にいるのはだれ、どうして痛がるの」と言う。すると穴からは、「私はあなたのところに通っていた者、今朝首の下に針を刺された。私の本身は大蛇。出て行きたいが、傷のため日ごろのように変化することもできない。怖い姿を見せるわけにはいかないが、あなたが恋しい。」と答えがある。娘は「たとえどんな姿であろうと、日ごろの情けは忘れない。出て来てほしい。最後の有様も見たい。少しも怖くない」と言う。 **〔娘と大蛇の会話〕**

② すると大蛇は穴の中からは這い出でた。目は銅の鈴を張ったようで口は紅を含んだよ

う、頭には角耳を垂れ、髭も生えて、獅子のようであった。娘は衣を脱いで、蛇の頭にかけ、針を抜いてやった。　〔大蛇の姿説明〕

③ 大蛇は、「あなたの腹に一人の男の子が宿った。もし十カ月に生まれれば日本国の大将になれるが、五か月に生まれるので九国の武士しかなれないであろう。九国には並ぶ者がなく、弓矢をとっては人に優れ、賢く心も強いはずだ。恐ろしい者の種だから捨てずに育てよ。子孫の末まで守護するだろう」といった。　〔蛇の子誕生予言〕

(6) ① 大蛇は、再び穴の中に入って死んでしまった。　〔大蛇の死〕

② この大蛇とは嫗岳明神の垂迹であった。塩田大夫妻と眷族たちは皆怖くなって家に帰った。　〔来訪者の正体〕

(7) ① 月満ち、花の御本に男の子が誕生。成長するにつれて、容顔もゆゆしく、心も強かった。母方の祖父の名に因んで「大太童」と呼ぶ。裸足で野山を走るので足に皺が常にできていたので異名を「皺童」、または「皺大弥太」と呼ばれた。その五代目の孫が尾形三郎惟義である。　〔始祖誕生〕

② 蛇の子の末を継ぐべき印として、身に蛇の尾の形と鱗があったので尾形三郎と言った。　〔蛇の子孫の印〕

3. 祖母嶽伝説の諸伝承

上記の祖母嶽伝説の諸伝承のものとしては、次のようなものがあげられる。

①『源平盛衰記』古巻第三十三「緒方三郎平家を責むる事」
②『平家物語』巻第八「緒環」
③『平家物語』(延慶本)第四「伊栄之先祖事」
④『古事記』中巻　崇神天皇「三輪山伝説」
⑤『日本書紀』巻第五　崇神天皇(十年九月)、「三輪山伝説」
⑥『常陸国風土記』「那賀の郡」
⑦『新撰姓氏録』「大和国神別」
⑧『肥前国風土記』「松浦の郡」

以上の祖母嶽伝説諸本を対照して示すと、次のようになる。

モチーフ＼諸本		源平盛衰記	平家物語	平家物語(延慶本)	古事記	日本書紀	常陸国風土記	新撰姓氏録	肥前国風土記
1	①女主人公の名	○日向国の塩田の大々夫という徳人の娘・花の御本	○豊後の片山里のある人の一人娘で夫のいない女(長門本は、豊後国知田村の赤雁太夫の一人娘の柏原の御本)	豊後国の知田の庄の大丈夫の一人娘(南都本は豊後国伊智田村、片山里の大太夫の一人娘で柏原のオウト)	○容姿が整って、美しい活玉依姫(陶津耳命の娘)	○倭迹迹日百襲姫は大国主神の妻になった	×茨城の里の甫時臥山、兄妹がいた	○三島の溝杭耳の娘・玉櫛姫	○弟日姫子
	②女主人公の隔離	○秘蔵して後園に屋敷	×	○秘蔵して後園に屋敷	×	×	×	×	×
2	来訪者の姿	○立烏帽子に水色の狩衣の二四・五の男、美男子	○水色の狩衣の男	○狩衣の男	○容姿、身なり比類ないほど立派な壮夫	○昼は姿を見せず、夜のみ来る	○姓名のわからない男。夫婦になる	(大物主神)	○顔形が狭手日子に似た男
3	正体把握方法	○針と倭文の苧環	○針と倭文の苧環	○針と倭文の苧環	○麻糸(へその紡麻)と針、赤土撒く	×(針と苧環はないが、積極的に正体を追及)	×	○苧を紡いて衣にかける	○続麻(紡いだ麻糸)
4	来訪者の居住地	○日向と豊後の境の嫗岳山の大きな窟の中	○日向国の境の優婆岳山の麓の大きな岩屋	○当国の深山の嫗嶽の苔深き巌穴	○三輪山の神の社	○後、天空を踏み轟かして三諸山(三輪山)	(甫時臥山)	○茅渟県の陶邑を経て、大和国の御諸山(三輪山)	○褶振の峰の沼の辺り
5	①娘と大蛇の会話	○詳細、立ち聞き型	○立ち聞き型	○詳細、立ち聞き型	×	○詳細	×	×	×
	②大蛇の姿説明	○長は知らず、臥長は五尺計也、目は赤銅の鈴を張った様、口は紅を含む様	○臥しだけは五六尺、跡枕べは十四五丈	×岩穴から出てこない	×	○(美しい小蛇)	×	×	×
	③蛇の子誕生予言	○男の子	○男の子	○男の子	×冒頭で意富多々泥古誕生の理由	×	×	×	×
6	①大蛇の死	○	×	○死は言わないが、音なし	×	×女が陰部をついて死ぬ(箸墓由来)	×伯父を恨んで雷の力で殺す	×	○後、蛇と弟日姫子(墓を作る)
	②来訪者の正体	○大蛇、嫗嶽明神の垂跡	○大蛇、高知尾明神の身体	○大虵、(豊後国の)この山を支配	○大物主神	○小蛇、三諸山(三輪山)	×	×三諸山(三輪山)	○蛇(身は人間、頭は蛇)

モチーフ＼諸本		源平盛衰記	平家物語	平家物語(延慶本)	古事記	日本書紀	常陸国風土記	新撰姓氏録	肥前国風土記
7	**①始祖誕生**	○尾形三郎惟義の始祖(祖父の塩田大夫の名に因んで大太童、鞁童、鞁大弥太、	○緒方惟栄の始祖(祖父の名に因んで大太、あかがり大太)	○尾形伊栄の始祖、(祖父の名に因んで大太、赤雁大太	○意富多々泥古、神君と鴨君の始祖	×	○片岡村の子孫が社を建立、祭る。蛇を盛った皿と甕も伝承	○大三輪(おおみわ)の始祖の大神朝臣	×
	②蛇の子孫の印	○蛇の尾の形、鱗あり	×	背中に虵の尾の形	×	×	×	×	×

以上のように、祖母嶽伝説の諸伝承は、(1)の〔女主人公の名〕から最後の(7)〔始祖誕生〕までのモチーフ構成によるものである。そこで、日向国や豊後国を舞台とする「祖母嶽伝説」の諸本間の異同を検討し、また伝承様相について鉄文化との観点から詳しく論じてみたい。

(1) 女主人公の名・女主人公の隔離

①〔女主人公の名〕についてみると『平家物語』などが国を豊後国にしているのに対して、『源平盛衰記』では日向国とし、主人公の花の御本の父も塩田の大々夫とするなど、違いが見られる。『源平盛衰記』は国を日向国の塩田としており、なぜ塩田というのか、究明すべき問題である。②〔女主人公の隔離〕について、『源平盛衰記』と『延慶本』では、父親が娘を秘蔵して後園に屋敷を作り、一人暮らしをさせ、外部から男が侵入できないようにしているのが、他の伝本に見られない特徴で、その原拠とした説話が『古事記』収載の三輪山神婚説話とは違うことを示す。しかしこの一人暮らしの設定は、却って正体の知れない男の娘の部屋への一方的な訪問と交わりのきっかけを提供していると言える。

(2) 来訪者の姿

〔来訪者の姿〕について特に『源平盛衰記』と『平家物語』では、「水色の狩衣」を着た男としていることに注目する必要があろう。なぜ「水色の狩衣」なのか、従来はあまり注目していなかったが、水色とは、普通無色透明であるが、池や湖などの色のように、緑みのある青色である。この青色とは酸化した鉄の色を表すこともあり、夜訪問してくる男がおそらく鉄文化と関連する人物であることを示す。この点は後で見る韓国の神話でも同じことが言える。また『源平盛衰記』では、「二四・五の男で美男子」と設定しているが、この趣向

は、『古事記』の「容姿、身なり比類ないほど立派な壮夫」に近い叙述である。このように男の姿が美男子で、魅力的存在であるという設定は、一人で寂しく暮らしている娘が正体の知れない男の訪問と性的要求を拒否できない状況を作りあげているといえる。

(3) 正体把握方法

これについて『源平盛衰記』の諸伝本は、針と倭文(日本古代の織物)の苧環とするのに対して、『古事記』では針と麻糸(へその紡麻(うみそ))としており、やや趣向が異なる。糸と針は、生まれた子供が母親と臍で繋がっていることと同じように、家にいる娘と外に住む来訪者が糸で結びついていることを意味し、『古事記』での「へその紡麻」とはそのことを示すものであろう。さらに『古事記』では、夜の来訪者に赤土を撒くように親から指示されるところに注目する必要があろう。赤土を撒く行為は、従来の研究では、①不浄な侵入者を防ぐための呪術的行為、②赤土を踏んだ足跡をつけるためであると、解釈している[4]が、筆者は赤土を撒く行為は、夜の訪問者が鉄文化と関連する人物であることを示していると考えたい。昔から天然の酸化鉄の顔料などは黄土と呼ばれることがあり、たとえば阿蘇カルデラ内に堆積した黄土の「リモナイト」は、「褐鉄鉱」や「湖沼鉄」とも呼ばれ、水草の根に付く水酸化鉄で、その成分の約七割が鉄成分の黄土色の土と言われる。だから『古事記』において黄土を撒く行為は、夜の訪問者が鉄文化を保持した人物であることを間接的に表すものであろう。『日本書紀』の方は、最初から姫君は大物主神と結婚している状態なので、正体把握に積極性が見られる。5の①娘と大蛇との会話において「私の姿に驚かないで」、6の②来訪者の正体において、姫が「小蛇の姿を見て驚き叫んだ」などのくだりは、『源平盛衰記』に近いもので古事記には見えない叙述である。だから『古事記』と『日本書紀』はその原拠とした説話が必ずしも同じものであったとは言えないであろう。

(4) 来訪者の居住地

〔来訪者の居住地〕について『源平盛衰記』などの伝本では、日向国または日向国と豊後国の境にある嫗嶽山の穴とするのに対して、『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』では、三輪山(三諸山)となっており、『源平盛衰記』などは、豊後国や日向国の地元に根ざした伝承であることが言えよう。特に⑧『新撰姓氏録』では大国主神が三島溝杭耳の娘・玉櫛姫と結婚し、毎夜通ったが、その正体を知るため苧環の糸で確認すると、茅渟県の陶邑(現在の大阪

4) 山口佳紀・神野志隆光校注訳(1997)『新編日本古典文学全集１・古事記』小学館

堺市)を経て、三輪山に至ったとあって、大物主神は茅渟県の陶邑と関連が深い。『日本書紀』崇神紀七年二月、八月の条に、三輪山の大物主神が倭迹迹日百襲姫命に乗り移って天皇に託宣を下した。それに従って大物主神の子・太田田根子を「茅渟県の陶邑」で見つけ出し、出所を聞いたところ「父は大物主神、母は活玉依媛で陶津耳の娘です」と答えた。この陶邑は須恵器の産地。須恵器とは、青く硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃(5世紀前半)に朝鮮半島から伝わったとされる。須恵とは韓国語で鉄を意味し、太田田根子が製鉄と関連する人物であることを示す。『日本書紀』の初代天皇神武の大后の出自を伝える「神武記」では、三島溝咋の娘で、名は勢夜陀多良比売が美しかったので、美和の大物主神が見染めて、その美人が大便をするとき、丹塗矢に化して結婚、生んだのが富登多多良伊須須岐比売命であり、またの名を比売多多良伊須須気余理比売(神武天皇の妃)としたという。ここで多多良は鍛冶場で火を起こす時に使う蹈鞴のこと。大蛇として象徴される大物主神と火神の娘との結合、これは後で触れる韓国の伝承とも通じるものである。

(5) 娘と大蛇の会話

①〔娘と大蛇の会話〕については、『平家物語』よりは『源平盛衰記』と『延慶本』が詳細に語る。『源平盛衰記』や『平家物語』『延慶本』では、娘が日向と豊後の境の嫗岳という山に至り、大きな穴の口で立ち聞きすると、「中からうめき声がし、身の毛もよだつほどであった」と言い、昔話のように蛇の親子が対話を交わすこととせず、娘が蛇と会話をやり取りする展開となっており、『源平盛衰記』などと昔話との交流が想定される。あるいは『源平盛衰記』などは、こうした立ち聞き型の昔話に準じた説話を原拠としているかも知れない。これは『古事記』の三輪山神話には見えない趣向である。だから単に『古事記』が歴史的に古いからと言って、『古事記』から『源平盛衰記』へ、直接影響を与えたと簡単には決め付けられないと考える。②〔大蛇の姿説明〕について『延慶本』では、岩の中に入っている大蛇に姫がその姿を見せてくれと頼むが、最後まで姿を見せない叙述になっているのに対して、『源平盛衰記』と『平家物語』では大蛇が這い出てその姿を見せることになっている。『平家物語』はそのときの大蛇について、「臥しだけは五六尺、跡枕べは十四五丈」としており、『源平盛衰記』では、「長は知らず、臥長は五尺計也」と、『平家物語』とほぼ同じ趣向を見せてはいるが、『源平盛衰記』ではさらに、「眼は銅(あかがね)の鈴を張るが如く、口は紅を含めるに似たり」と記し、違う叙述が見られる。これは大蛇と鉄との関連を示すものであろう。③〔蛇の子誕生予言〕について見ると、『古事記』では意富多々泥古は、大物主神と陶津耳命の娘である活玉依毘売の間の子供として描かれているので、蛇の子誕生の場面は設けられていないが、『源

平盛衰記』の諸伝本では、蛇の子誕生を予言しているのが特徴である。これは『源平盛衰記』の諸伝本は、最後のところで戦国武将の惟栄を恐ろしき者の子孫として描くために導入されているものと考える。

(6) 大蛇の死

①〔大蛇の死〕について、『古事記』や『平家物語』では言及がないのに対して、『延慶本』では岩穴の中で「音なし」ものとして語るだけで死んだという直接的な表現は使っていないが、『源平盛衰記』では「大蛇穴に引き入りて死にけり」と、大蛇の死が語られている。②〔来訪者の正体〕について、『古事記』では大物主神とあるだけで、蛇かどうかがはっきり書かれていないが、『日本書紀』では、大物主神は「美麗しき小蛇」(巻第五崇神天皇十年九月条)、「大蛇」(巻第十四雄略天皇七年七月条)となっており、大物主神が蛇として描かれている。『源平盛衰記』の諸伝本でも来訪者の正体を大蛇としている点では共通しているが、その大蛇について、『源平盛衰記』では「豊後国の嫗嶽明神の垂跡」、『延慶本』では「この山(豊後国の嫗嶽山)を支配する」となっているのに対して、『平家物語』では大蛇を「高知尾明神の神体」と記されており、やや違う趣向を見せている。昔話でも来訪者の正体が蛇である伝承が主流をなしているが、河童、龍の子、大猪、大口魚、蝦蟇、古鰻、毛虫など多様な形で表れるが、ほとんどが水と関連した動物である。

(7) 始祖誕生・蛇の子孫の印

①〔始祖誕生〕について、花の御本と大蛇との間で生まれた子供が『源平盛衰記』では、祖父の名に因んで大太童、鞁童、鞁大弥太、『平家物語』では大太、あかがり大太となっており大きな違いは見られない。しかし『延慶本』では大太、赤雁大太となっており、鳥の名を付しているのが特徴である。また大神氏系図では、九九〇年四月、藤原伊周(これちか)が悪事によって流刑され、豊後国の塩田太夫に預けられ、緒方庄の萩堵螻(はぎとろ)に住んだ。その娘のもとに嫗嶽明神の化身である大蛇が夜な夜な通い、その間で子供が生まれ、大蛇の予言で姓を大神、名を大太と付け、またの名を銅大太と言ったという[5]。これについて渡辺氏は、「銅大太とあるのは、胝(鞁)大太の転訛であろう[6]」というが、この伝説を鉄文化の視点から眺めれば「銅大太」という名称が「胝(鞁)大太」より先行した可能性があり、女主人公の父親が嫗嶽

5) 渡辺澄夫(1981)『源平の雄　緒方三郎惟栄』第一法規出版株式会社
6) 前掲注5に同じ

山の銅や鉄などの採鉱や鉄精錬にかかわった人物であることを示すものであろう。また、『延慶本』では娘と大蛇の間で生まれた子供の名を祖父の名に因んで「赤雁大太」としており、『平家物語』の長門本でも、女の父親を「赤雁太夫」としているのが注目すべきところである。なぜ「赤雁」という鳥の名称を付けたのか。「赤雁」も鉄文化の視点から論じる必要があろう。赤雁の背に乗って朝鮮半島の新羅から比礼振山(佐毘売山・権現山)に飛来し、比礼振山に舞い降り、近郷を開いたという狭姫(食べ物の神の大宜都比売神の娘)物語。「狭姫」においての「サヒ」とは鋤や鍬の刃先に装着するような鉄片を言い、これの酸化したものが「サビ(錆)」であった[7]。その比礼振山には佐毘売山神社(島根県益田市)があり、その周辺には古い鉱山がある。一五世紀には島根県太田市大森町にも佐毘売山神社は分霊して、石見銀山の守り神として祀られている。比礼振山に鉱山の神が祀られるようになったのは平安時代といわれる。他にも益田近辺には歴史の古い鉱山があり、大森より先の鉱山文化が存在する[8]。佐毘売山神社の動きは鉱山技術者の移動と関連があり、赤雁は鉱山の神と結び付いている。上記の『延慶本』や長門本『平家物語』に見える「赤雁太夫」も製鉄技術者と関連して理解する必要があり、嫗嶽(祖母嶽)明神を祖神とする大神氏一族が製鉄文化を持った金属技術集団であることを示すものであろう。②(蛇の子孫の印)については、蛇の子の末を継ぐべき印として、身(背中)に蛇の尾の形と鱗があったので尾形三郎といったというもので 『源平盛衰記』と『延慶本』のみに存在する。このように生まれた子に蛇の印として鱗があるというのは、昔話の方でも、熊本県熊本市、香川県丸亀市、山口県大島郡、愛知県名古屋市、新潟県南蒲原郡、岐阜県大野郡などの伝承にも見られ[9]、『源平盛衰記』はこうした伝承との交流が考えられる。大分県豊後大野市三重町には肝煎御霊宮(祖母嶽神社)が存在するが、その祭神は豊後大神氏の祖神である、祖母嶽大蛇の霊であり、鱗を神体として祀っており[10]、『源平盛衰記』などが記す「蛇の子の末を継ぐべき印として、身に蛇の尾の形と鱗があったので尾形三郎と言った」という叙述と一致する。

以上で述べたように『源平盛衰記』『平家物語』では、中央で編纂された『古事記』や『日本書紀』などと違って、豊後国や日向国を舞台として展開されているのが特徴である。『古事記』は、『源平盛衰記』に見える、1の②女主人公の隔離、５の①娘と大蛇の会話②大蛇の姿説明③蛇の子誕生予言、6の大蛇の死、7の蛇の子孫の印などを欠くなど、その趣向はかなり違うもので、両者は原拠とした説話が必ず同一であるとは言いにくい。渡辺澄夫氏は、「豊後大

7) 真弓常忠(1981)『日本古代祭祀と鉄』学生社
8) 「佐毘売山神社」(『日本歴史地名大系』第33巻、1995)参照
9) 「蛇聟入・苧環型」(関敬吾『日本昔話大成　第2巻　本格昔話一』角川書店、1978所収)
10) 太田重澄著(1741)『寺社考』

神氏の出自は大和大神(おおみわ)氏の後であることには異論はない[11]」というが、上記のように、『源平盛衰記』などの豊後国と日向国を舞台として展開されるものと、古代の三輪山伝承とはかなりその趣向を異にしている。何らかの影響関係はあるかも知れないが、だからといって大和の神話をそのまま、豊後国に移植され再現したとは考えにくい。 すなわち、日本の苧環型蛇聟入のすべてが古代の三輪山伝承の直系であるとは限らないものである。文献ではないが、日本の昔話では、「苧環型蛇聟入」が節句由来などと結合して蛇神の子種を否定する伝承(立ち聞き型)が多い。すなわち、糸の跡をつけると岩穴の中に入っており、そこで立ち聞きをすると、蛇の親子が話している。小蛇が親蛇に子を孕ませたというと、親蛇は節句の桃酒、菖蒲酒、菊酒を飲むと子が下りるという。娘の母はそれを聞き、娘に節句の桃酒などを飲ませると、盥三倍(七倍)ほどの蛇の子が生まれ、またはお腹の蛇の子が下りた。だから女は節句の酒を飲まなくてはいけないと伝える[12]。このように蛇体を邪悪なものとして、その子種を堕胎させることは、源平盛衰記などのような英雄始祖誕生を語るものとは大きな隔たりがあると言わざるを得ない。この子種を否定する苧環型蛇聟入は日本の伝承に多く見られ、日本的特徴といえるが、この話型はすでに韓国の伝承にも見られるので中国からの直接の影響というよりは朝鮮半島との関連から論じるべきであろう。

『源平盛衰記』では5の②大蛇の姿説明において、「目は銅の鈴を張ったようで口は紅を含んだよう」、生まれた子供については、異名を「鞁童」、または「鞁大弥太」、「銅大太」(大神系図)とする。『延慶本』では大太、赤雁大太となっており、鳥の名を付しているのが特徴である。これは赤雁と鉄との関連からであろう。緒方氏をその祖とした大神氏は、製鉄文化を持った金属技術集団であり、祖母山から豊・日境界の山々には豊富な鉱山が続いたのである[13]。『源平盛衰記』と『平家物語』では、夜の訪問者の姿が「水色の狩衣」であった。水色とは、普通無色透明であるが、池や湖などの色のように、緑みのある青色である。この青色とは酸化した鉄の色を表すこともあり、夜訪問してくる男がおそらく水神であり、鉄文化と関連する人物であることを示す。『源平盛衰記』『平家物語』では、夜の来訪者の正体が大蛇であり、その大蛇は、嫗嶽明神(祖母山)や高知尾明神の身体(垂迹)で、豊後大神氏はこの嫗嶽(祖母嶽)明神を祖神とするのであった。

---

11) 前掲注5に同じ
12) 前掲注9に同じ。松本孝三(1994)「蛇聟入」(稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』弘文堂)参照
13) 富来隆「大神氏の始祖惟基をあかがりの大弥太ということについて」(1)~(3)(『佐伯史談』129、130、131)

4. 祖母山信仰―嫗嶽(祖母嶽)明神と豊玉姫命、彦五瀬命

前述したように、豊後大神氏は嫗嶽明神をその祖神とするものであったが、鎌倉時代成立の『源平盛衰記』や『平家物語』には、祖神の名称が「祖母嶽明神」ではなく、「嫗嶽明神」や「高千穂明神」となっている。そこで「祖母嶽」や「祖母」という呼称がいつ頃から登場したのかを検討してみたい。先ず、大分県竹田市大字神原1772番地(旧豊後国　直入郡)には健男霜凝日子神社があるが、この神社については唐橋世済著『豊後国志』(一八〇三年)巻の六[14]に次のような記録が見える。

○ 健男霜凝日子神社：豊玉姫命を以て彦五瀬命を配祀し、嫗嶽神とす。故に嫗嶽明神と称す。
○ 嫗嶽：入田郷の南に在る。一に鵜羽と作し、祖母と名づく。蓋し山に豊玉姫命を配祀す。神武帝の皇祖母たる所以也。
○ 神原山：井手上村より百余歩登る、巨岩窟の中に祠有り。白雉二年嫗嶽の本祠を作る所也。祠の傍らに路有り、嫗嶽の巓に達す。巓に一石祠有り、(中略)里人是を以て上宮と称し、本祠を以て下宮と称す。(中略)豊玉姫命を以て彦五瀬命を配祀し、健雄霜凝日子神と為す。

上記のように嫗嶽明神とは、神武天皇の祖母である豊玉姫命に孫の彦五瀬命を配祀して、これを嫗嶽明神としていることや、嫗嶽は入田郷の南にあり、鵜羽と書いてこれを祖母と名づけたとあり、豊玉姫命の出産と関わる鵜羽と祖母とが同一視されているのが興味深い。また嫗嶽の頂上には一つの石の祠があり、これを上宮とし、健男霜凝日子神社を下宮とし、この下宮に豊玉姫命に彦五瀬命を配祀し、健雄霜凝日子神としたということが記されている。

また、伊藤常足著『太宰管内志』(一八四一年)豊後之四「直入郡」[15]にも、この建男霜凝日子神社についての記述が見える。

○ 建男霜凝日子神社
〔延喜式〕に、直入郡建男霜凝日子神社あり、建男霜凝日子は多祁袁志毛古理比古とよむべし。御名の義、建男は、勇猛なる男神に因て負せるべし。霜凝は大しく結ぶ処に負せるべし。(中略)〔戸次軍談一巻〕に彦五瀬ノ命、則姥嶽大明神、是大神氏の祖神なりなどあり。〔亀山随筆〕に、健男霜凝日子神社は、直入郡入田郷神原村祖母嶽北麓ノ岩窟ノ中に在り。彦五瀬ノ命を祭て下宮と云。比咩神社を上宮と云。

14) 二豊文献刊行会編(1931)『豊後国誌』朋文堂 所収
15) 『復刻太宰管内志』(防長史料出版社, 1978)所収

○ 比咩神社

〔亀山随筆〕に、直入郡比咩神ノ社は、下宮の御神五瀬彦命の御祖母神豊玉姫を祭る。故神を比咩神と申し、山を祖母嶽と云とあり。

上記の『太宰管内志』の引く、『戸次軍談』(彦城散人著、一六九八年)には彦五瀬ノ命がすなわち姥嶽大明神であり、これがまた大神氏の祖神であると記す。江戸時時代末期成立の森春樹著『亀山随筆』にも健男霜凝日子神社は、直入郡入田郷神原村祖母嶽北麓の岩窟の中にあり、彦五瀬命を祭って下宮とし、比咩神社を上宮としたと書かれている。また同書には比咩神社のこととして、直入郡比咩神の社は、下宮の祭神である五瀬彦命の御祖母神・豊玉姫を祭ることから比咩神と称し、その山を祖母嶽と言ったとある。よって鎌倉時代の『源平盛衰記』や『平家物語』などに見える嫗嶽大明神が江戸時代に入り、神武天皇や彦五瀬命の祖母である豊玉姫命信仰と結び付き、嫗嶽大明神という名称とともに祖母嶽や祖母嶽明神も併用して使われてきた可能性がある。こうした祖母嶽信仰が広められた背景としては、嫗嶽明神を祖神として祭る豊後大神氏の関与が考えられる。大分県豊後大野市三重町には肝煎御霊宮があり、太田重澄著『寺社考』(一七四一年)[16]には次のように記されている。

伝ニ曰ク、大神氏ノ祖神祖母嶽大蛇ノ霊也。蛇鱗三枚ヲ崇メ奉ル。天正一四丙戌年薩州ノ賊軍乱入ノ時、神体ノ鱗ヲ奪ウ。文禄年中、神木ノ杉を伐ル。白鷺樹上ニ鳴キ、鮮血斧下ニ迸ル。木ノ切リ口六坪半有リ、故ニ杉百本ヲ植エテ神怒ヲ宥ム。

上記のように、大神氏の祖神は祖母嶽大蛇の霊であり、蛇鱗三枚を神体として祭っていることがわかり、これは『源平盛衰記』などにおいて「蛇の子の末を継ぐべき印として、身に蛇の尾の形と鱗があったので尾形三郎と言った」という叙述と一致するものである。また神木を切った際、白鷺が泣き、鮮血が斧の下から迸ったとあるが、鷹や鳥は製鉄と関連しており、大神氏の祖神が製鉄とも関連していることを示すものであろう。また、波多野正男『大野神社大鑑』(一九二七年)にも肝煎御霊祠(祖母嶽神社)について、『豊国誌』の記事を引用してこれと同じ内容が紹介されている[17]。以上を小まとめすると、先ずは神武天皇の祖母である豊玉姫命に孫の彦五瀬命を配祀して、これを嫗嶽明神とする。また嫗嶽の頂上には

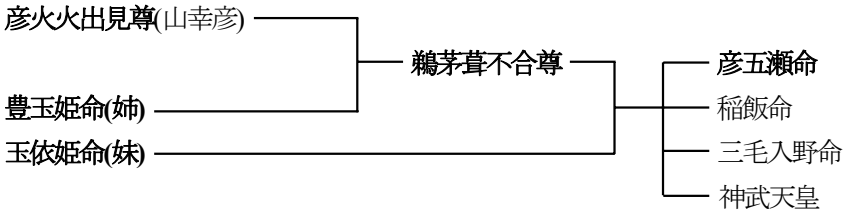
16) 佐々木安麿『寺社考』(1981)所収

17) 肝煎御霊祠　豊国誌曰(祖母嶽神社)三重ニアリ。コレ大神氏祖神祖母嶽大蛇ノ霊也。祖母嶽ハ所謂嫗嶽也。(宇林拾葉に曰く嫗嶽明神日州也在豊後境)即チ蛇鱗三枚ヲ神体トシテ崇め奉ル。天正一四年(一五六八年)薩兵ノ為ニ奪ワレヌ。ソノ後文禄ノ頃、此社ノ神木ヲ切ル事アリシニ白鷺来ッテ樹上ニナク。人猶是ヲ覚ラズシテ斧ヲ入ル。忽チ鮮血斧下ニ流ル故ニ野良ニ杉百本ヲ植エテ慰ムト云フ。

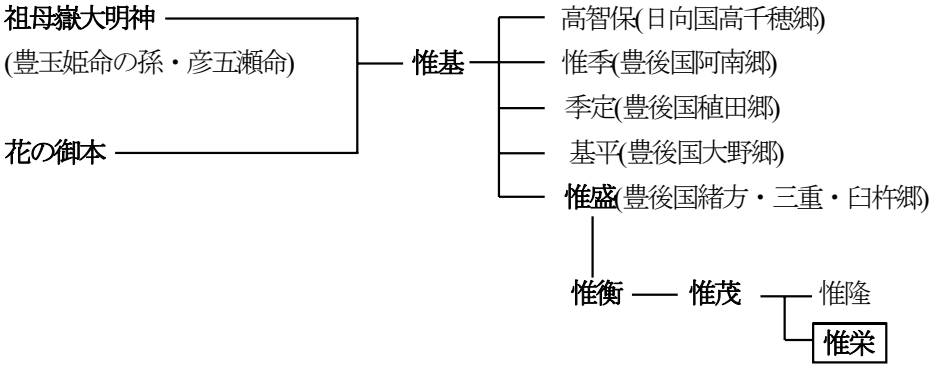
一つの石の祠あるが、これを上宮とし、嫗嶽山の北麓の岩窟にある健男霜凝日子神社を下宮とし、ここに豊玉姫命と彦五瀬命を配祀し、健雄霜凝日子神としたという。 このように鎌倉時代の『平家物語』などに見える、大神氏の祖神としての嫗嶽山の嫗嶽大明神が江戸時代に入り、彦五瀬命の祖母である豊玉姫命信仰と結び付き、祖母嶽や祖母嶽明神(大蛇の霊)と同一視されるようになったと言えよう。

苧環型蛇聟入譚に属する祖母嶽伝説と奈良の三輪山神婚説話はその内容や大蛇が神様として祭られている点においては似通っており、ともに鉄文化を背景にしている点では一致していると言えるかも知れない。しかし祖母嶽伝説は、三輪山神婚説話と違って、苧環型蛇聟入譚の立ち聞き型に近い趣向が見られており、神武天皇の祖母である豊玉姫命や兄の彦五瀬命神話と結び付いて伝承されている点においては大きく相違していると言わざるを得ない。では祖母山に神武天皇の祖母である豊玉姫命信仰を持ち込んだのは誰なのかが問題になるが、それは自らの祖先を嫗嶽(祖母嶽)明神として信仰してきた豊後大神氏であろう。豊後大神氏は自らの血筋が天皇家と繋がっている神聖で貴い存在であることを主張することによって、奈良の三輪氏(大神氏)とは違う存在であることを強くアピールしようとしたかも知れない。

○皇室略系図



○豊後大神氏略系図



(東京大学史料編纂所影写本「大神氏系図」、渡辺澄夫『緒方三郎惟栄』所収参照)

5. 苧環型蛇聟入譚の祖母嶽伝説と卵生型始祖神話

日朝神話研究者で著名な三品彰英氏は『神話と文化史』[18]において、「始祖卵生神話という特定な要素に関する限りにおいては、わが(日本)神話は、その分布境域外に位置しているのである」「思うに卵生神話をそのまま受け入れなかったほどに、わが神話伝説界は卵生要素には縁遠かったようである」と論じられているように、従来学界では日本にははっきりとした卵生神話が存在しないか、卵生神話が希薄なものとされてきた。確かに記紀神話や三輪山神婚説話などの文献を見る限りにおいては、日本には明確な卵生神話は影の薄いものとなっていると言えよう。でははたして日本には卵生神話が伝わっていないのであろうか。この問題を探るため、先ずは大分県大野郡に伝わる卵生型始祖神話を紹介したい。

> 娘の名は宇田姫といい、大蛇が死ぬとき箱をやる。九十九日目に開くと中から金色の玉が三つ出て、三人の子供となる。高田太郎、臼杵次郎、緒方の三郎である。姫が百日目で開いたら時の都は宇田に移されたであろうという。宇田姫を祀ったのが宇田神社。三つの玉の出た所が三玉区である。また長者を直入郡柏原村の鳩原長者ともいい、箱から生まれたのを佐伯の太郎、方加世の次郎、緒方の三郎ともいう[19]。

これは苧環型蛇聟入譚の前半部分である、美しい女性・宇田姫の部屋に毎晩見知らぬ男が訪ねて来、その正体を知るために糸を針に通して男の襟元などに刺して置くところは欠如しているが、説話の内容から見て省略されていることが考えられる。するとこの説話は大蛇からもらった箱の中から金色の玉(おそらく卵)が出てき、その玉が三人の子供となり、それが高田太郎、臼杵次郎、緒方の三郎であると主張しており、卵生型(人卵型)氏族の始祖神話となっている。ここで大蛇が百日目まで箱を開けてはいけないと言ったが、その禁忌を破って九十九日目に開けて見ることによって、時の都が宇田に移されなかったと不完全な状態で終わってしまったことを叙述するが、この趣向は記紀神話の豊玉姫命説話や『日本書紀』の三輪山神婚説話などにも見える。次の説話も大分県に伝わる苧環型蛇聟入譚である。

---

18) 第一章「南方系神話要素」の第一節「卵生族神話」(『三品彰英論文集　第三巻』平凡社、1971)所収
19) 前掲注9に同じ

村の少女が男の袴の裾に白糸を縫いつけその糸をたどっていくと、今の龍子淵に行っている。岩窟の中で、自分はこの針のために死ぬ、お前の腹には三子がある。それを淵に六十日間沈めて顔を見ないでいると、天下に覇をとなえる勇士となるであろうという。生まれた三つの卵を箱に入れて淵に沈めるが三子が箱の中で騒ぐので五十七日目にしんぼうしきれないで開く。三人の子は家に育てられて高千穂太郎、緒方次郎、佐伯次郎となる。三人ともこの地方の勇士となったが、三日早かったので天下をとることができなかったという。今に祠があって祀ってあるという[20]。

上記は正体の知れない男が少女の部屋を毎晩訪ねて来る場面は省略されているが、男の袴の裾に白糸を縫いつけその跡を辿っていくと龍子淵に至ったとあり、男の正体がはっきり表れていないが、龍子淵という地名からその正体は龍であることが考えられよう。だとすると、龍の予言通り少女のお腹からは三つの卵が生まれており、その卵から三人の子供が誕生、それが高千穂太郎、緒方次郎、佐伯次郎であると、その始祖由来を語っている点は前記の大分県大野郡の卵生型始祖神話と同様である。箱を開けるのが三日早かったので天下をとることができなかったというのも大分県大野郡の伝承において、一日早く開けることによって時の都が宇田に移されなかったと不完全な状態を述べることと同じであり、緒方三郎惟栄の始祖誕生譚にも通じる趣向である。このように大分県の伝承は、卵から生まれた者が一族の始祖として祀られているので卵生型始祖神話に属すると言えよう。次の熊本県阿蘇郡高森町高森に伝わる伝承も苧環型蛇聟入譚の卵生型始祖神話である。

かない部落の長者屋敷に両親と娘が暮らしていた。娘が年頃になり、若武者がずっと通って遊びにくる。男が名前を明かさないので両親が竹田で木綿糸を買ってきて糸巻きに巻き、針を付けて、娘に男のはかまの裾に針を刺すようにと教える。針を刺された男は娘に「今日限りでもう来ない。卵が三つ生まれようが、その養い分にこの玉を残しておくから二間ほどの家を建ててそれに卵とこの玉を入れ、三年と三月の間絶対開けないでくれ」と言い残して目の玉のような玉を置いて帰っていく。翌日両親と娘が糸を頼りに大川を渡り、みやど村を通っておばだけ村に至ると山奥の大きな洞穴に到着する。中でうなり声がするので娘が「もう一度元の姿になって会ってくれ」と言うと、「私は洞穴の主のうわばみだ。針が大切な尻尾に刺さったので病気になってやがて死ぬ。卵から生まれる子はみな偉い者になって親を大切にしよう」と言う。言われたようにして一、二年たつと卵を入れた家の中で剣道でもしているような騒ぎがするので、三年たったとき戸を開けてみるとりっぱな息子が三人いて、大騒ぎしている。一番先に出てきて

20) 前掲注9に同じ

竹田の太郎と名づけられた子はそこにいて偉い人になる。つぎの子は別府へ出し、別府の次郎と名づけられてこれも偉い人になる。三男の三郎はおがたにおもむきこれも出世するが、長者屋敷はまもなくつぶれてしまった[21]。

上記は、「三男の三郎はおがたにおもむきこれも出世するが、長者屋敷はまもなくつぶれてしまった」と、緒方三郎惟栄の始祖神話と関連して語られており、卵生型始祖神話に属するものである。正体の知らない男の袴の裾に糸巻きの針を刺して、その跡を辿ると洞穴に住むうわばみ(大蛇)であることがわかり、中で唸り声がし、大蛇が生まれてくる子供の将来について予言する点なども緒方三郎惟栄始祖神話と同じである。また卵と玉がセットになって登場しているが、その養い分に「この玉を残しておくから」という趣向は、豊玉姫伝承の伝える宮崎県鵜戸神宮において、豊玉姫がわが子のために玉のような自分の乳房を取り、地上に残して置いて海に帰ったという伝承に類似するものである。　しかし、「卵から生まれる子はみな偉い者になって親を大切にしよう」と、子供が卵から生まれることを予言する点においては、緒方三郎惟栄始祖神話(祖母嶽伝説)と大きく相違している。以上の点から判断すると、緒方三郎惟栄の始祖神話や豊玉姫命伝承成立の背景には、苧環型蛇聟入譚に属する卵生型始祖神話が先行して存在していたことが考えられる。人の手によって書かれて歴史に残った文献神話などは、著者の意思が反映される場合があるので、当時としては神秘性が薄く不人気の卵の要素は、制作の段階で意図的に排除された可能性を私たちは想定しなければならないであろう。このような卵生型始祖神話は、沖縄の中頭郡読谷村長浜にも伝承されている。

御殿の娘が芭蕉を紡ぎながら笑ったり話したりしているが、誰もいないので、隣の婆が「人間でないから、針に糸を通して男の額に刺し、あとをたどって行ってみよ」と教える。娘が針を刺し、あとを伝っていくと、洞窟に入っているので、人間でないことがわかる。娘は妊娠していて、竹籠の中に赤また一の卵を生む。卵の中から美人が生まれ、それぞれ育てて、六人はノロの家にやり、一人が親を養った[22]。

上記では男の正体がアカマタであるという。水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」には、妖怪としてのアカマタが登場するが、南方妖怪の仲間を率いる親分格で眼光の鋭さ以外は人間の姿そのままである。アカマタは奄美大島や沖縄諸島に生息する蛇で、体色は黄褐色で背

21) 稲田浩二(1980)『日本昔話通観』第24巻 同朋舎出版
22) 前掲注21『同書』第26巻(1983)

面に赤と黒の横縞が入る大蛇である。沖縄ではアカマタが美男子に化けて人を騙したり、そのアカマタが女性を連れ去ったりしたという伝承がある。こうした沖縄の人々のアカマタに対する信仰が上記の中頭郡読谷村長浜伝承にも反映されているといえるが、蛇の宿した卵から美しい女の子が生まれ、その子がノロ(巫女)の始祖になるという、卵生型始祖神話となっているのが特徴であると言えるが、蛇の卵から生まれたノロは、『日本書紀』に収載されている、蛇神の大物主神を迎える巫女としての性格を持つヤマトトヒノ命と響く存在である。また竹籠というのも豊玉姫神話において、天孫が海人の宮を訪ねるときに乗った竹籠の無目籠(まなしかたま)に対応していると言えよう。このように苧環型蛇聟入譚の中には、卵生型始祖神話が日本にも伝えていたのであるが、次では始祖の由来を語らない岡山県岡山市や静岡県磐田郡 の卵生神話を紹介する。

○ 娘が親に縁談をすすめられても行かない。部屋をのぞいて見ると毎晩男がくる。針に糸をつけて刺すと、戸の隙間から出て石垣の中に入っている。娘は妊娠している。部屋に誰も入れないようにして盥に水を入れ蛇の卵を一杯産む。　(岡山県岡山市[23])

○ 娘が敷いて寝る筵に蛇の鱗がついている。娘に問うと美しい男が毎夜、節穴からくるという。家人が藤をつむいで針に通して男の頭に刺せと教える。そうすると男は狂って節穴から抜けて逃げる。糸は滝の中に入り、滝はうずまいている。娘はその後、七盥の卵を生む。　(静岡県磐田郡[24])

日本の昔話では、夜訪ねて来る男の正体を知るため、糸を辿って行き、蛇の親子の話を立ち聞きし、娘のお腹に宿っている蛇の子を堕胎させる方法を知るというものが全国的に伝承されている。すなわち子蛇が母蛇に自分は釱(黒鉄)に刺され間もなく死ぬが、人間に子種を宿してきたから安心だというと、母蛇は三月の節句の桃酒、五月の節句の菖蒲酒、九月の節句の菊酒を飲むと子が下りるという。それを聞いた娘が母蛇の言う通りにすると、盥に七杯(七筥)の蛇の子を生んだというものである。日本ではこのように盥に直接七杯(七筥)の蛇の子を生んだという伝承が主流をなしていると言えるが、上記の①と②の伝承は、娘が蛇の子を生むのではなく、卵を生んだという、卵生神話の形を取っているのが注目される。このように日本の苧環型蛇聟入譚には卵生神話が存在するものであるが、三輪山神婚説話を伝える奈良の大神神社の境内には、巳(蛇)の神杉が存在し、蛇の好物であ

23) 前掲注9に同じ
24) 前掲注9に同じ

る卵を供えるという風習が伝わっているように、蛇と卵は深い関連がある。そこで蛇と卵がどういう関係にあるのか、次の佐賀県杵島郡や長崎県南高来郡小浜町富津の伝承を見ることにする。

○ 一人の娘をもつ老人が苗代を見まわると、蛇が小蛙を追っている。追うのを止めれば娘をやる、というと蛇は追うのを止める。その晩から男が娘のところにくるので、針に糸をつけて男の衣に縫いつけさせると大木の穴の中に入っている。老人が立ち聞きするとおれの体には銕が入ったから死ぬ、だが娘には卵を産みつけたと語っている。老人が易者に占わせると娘は死ぬかも知れぬが、その男に鷲の卵を三つ取らせ娘に食わせると助かるという。男を取らせにやると蛇になって木に登る。三つ目の卵を取りに行って鷲に食い殺される。再び易者が来て、これで娘は助かった。三月三日の酒に桃を浮かせて飲ませるとよいといい、小蛙になって帰る。それから三月三日の桃酒を祝うようになる。 (佐賀県杵島郡[25])

○ 父と娘が山に行くといつも若い男が柴刈に来ている。まじめな男は父娘に気に入られ娘と夫婦になり、娘ははらんだ。腹ばかり大きくなって体はやせ細る一方なので父は心配する。ある日訪れた山伏に聞くと、「若い男は蛇かもしれないので、熱湯をいれたらいに子供を生み込め、肥立ちが悪かったら、婿を取りにやって鷲の卵を食わせよ」と言う。お産のとき、ちょうど婿が留守だったので父親がいやがる娘を強いて、山伏の言ったとおり子供を熱湯の中に生ませると、真っ黒な蛇の子が千匹ほど生まれ、湯の中でみんな死ぬ。産後の肥立ちが悪いので男に鷲の卵を取りにやらせ、人をつけて見にやらせると夫は蛇になって気に登り卵を取ろうとして大鷲と格闘の末、力尽きて高い木から断崖の上へ落ちて死んだ。

(長崎県南高来郡小浜町富津[26])

上記の佐賀県杵島郡の伝承は、針に糸をつけて男の衣に刺して跡を辿っていき、「おれの体には銕が入ったから死ぬ。だが娘には卵を産みつけた」という蛇の会話を老人が立ち聞きする点からみれば卵生神話の苧環型蛇聟入譚の立ち聞き型に属するが、蛙報恩型や鴻の卵型が混在して語られている。このように蛇は卵と鳥、鉄と関連があり、これは卵生型始祖神話となっている、韓国の新羅の始祖神話にも通じる問題である。長崎県南高来郡小浜町富津では、糸を針に通して跡をつける場面は語られていないが、妊娠した娘が山伏の教え通りすると盥に蛇の子を千匹ほど生み、蛇である婿に鷲の卵を取りに行かせ、鷲との格闘の末、木の上から落ちで死んだというもので、卵生神話ではないが、蛇と卵は深い関連が

25) 前掲注9に同じ
26) 前掲注21『同書』第24巻(1980)

あることが言えよう。

従来学界では日本にははっきりとした卵生神話が存在しないか、卵生神話が希薄なものにされてきたが、以上で検討したように日本にも苧環型蛇聟入譚の中に卵生型始祖神話や卵生説話の形として密かに伝承されていたのである。

6. 韓国の苧環型蛇聟入譚の夜来者説話
―甄萱伝説の中国説話との関わり―

ここでは日本の祖母嶽神話と関連する韓国の伝承を検討することにする。前述したように、韓国では日本の祖母嶽伝説のような苧環型蛇聟入譚を「夜来者説話」と呼んでいる。一三世紀成立の『三国遺事』巻二には、後百済国(九〇〇~九三六)の始祖である甄萱について次のように記す。

(一) 光州の北村に金持ちがとてもきれいな娘一人と一緒に住んでいた。 〔女主人公の名〕

(二) ある日、娘は父に、「毎晩、紫色の服を着た男が訪ねて来て情を交わして帰ります」と言った。 〔来訪者の姿〕

(三) これを聞いた父は「長い糸を針に通してその男の服に刺しておきなさい」と教えた。 〔正体把握方法〕

(四) 娘が父の言う通りにし、夜が明けてその糸を辿っていくと、北側の塀の下に至った。 〔来訪者の居住地〕

(五) そこには大きいミミズが倒れており、ミミズの横腹に針が刺さっていた。 〔来訪者の正体〕

(六) その後、ミミズは死んだ。 〔来訪者の死〕

(七) その後、娘は身ごもって男の子を生んだ。その子は十五歳になると甄萱と名づけられ、彼は八九二年に自ら王と称して今の韓国全州に都を定める。 〔始祖誕生〕

(八) 甄萱が赤ん坊のとき、父が畑仕事をしていて母がご飯を持っていくために彼を山の林の中におろして置いたところ、虎が来て彼に乳を飲ませた。村の人たちはこれを聞いて皆不思議に思った。子供が成長すると体格が大きくて風貌が人より抜きんでており、気品もすぐれていた。彼はもともと新羅国の人であったが、新羅の綱紀が乱れていたので反逆の心を抱き、武士たちを集めて西南州県を攻撃すると、いたるところの民が甄萱に従った。 〔子の非凡さと強さ〕

このように甄萱伝説は、金持ちで美しい娘が見知らぬ男と交わり、その正体を知るために苧環の針を男の服に刺して跡を辿り、生まれた子供が後百済国の始祖となったというもので、日本の祖母嶽伝説ときわめて類似する。そこで両者の重要なところだけを簡単に抽出してを比べてみると、①毎晩娘の部屋を出入りする男の正体がミミズと蛇という相違しているが、ミミズと蛇は再生力の強い動物で、ミミズは「地龍」とも言っており、「緒方三郎惟栄始祖神話」を伝える『平家物語』の絵巻では大蛇が龍として描かれている。②両者は「緒方三郎惟栄」と「甄萱」という武将の誕生説話を描いており、両武将は今まで仕えていた主君に反逆を起こすという点でもとても似通っている。③甄萱神話に見える「紫色の服を着た男」が緒方三郎惟栄伝説では「水色の狩衣の服を着た男」になっているが、これは来訪者が異界のものであり、水色と紫色とは来訪者が鉄文化と関連する人物であることを表す。④「甄萱伝説」では甄萱の母が畑仕事をしていた父にご飯を持っていくために彼を林の中におろして置いたところ、山神の化身と言える虎が来て彼に乳を飲ませて育てた。甄萱が山の神の象徴となっている虎の精気を継承したものであり、甄萱の母系の呪術的根源が虎として象徴される山の神から由来するもので、これは緒方三郎惟栄の祖先神である大蛇が嫗岳嶽(祖母山)の山神の化身となっていることと相通る。では、山神の化身とも言える虎が来て、生まれて間もない赤ん坊に乳を与えたというのは、はたして韓国伝承の独自なものなのであろうか。芹原孝守氏の紹介された中国雲南省武定県環州村・漢族には次のような苧環型蛇聟入譚が伝承されているが、内容は次のようである[27]。

① 〔夜来者〕土司の娘のところに若者が通い、娘はやがて妊娠する。
② 〔苧環〕母親は糸を通した針を与え、若者に付けさせる。糸は母石の下の淵にのび、大蛇の体に針が刺さっている。人々が大蛇を刀で切ると、蛇は石に化す。
③ 〔子供の誕生〕やがて娘は子を産むが、土司は子を山に捨てさせる。虎が乳を与え、抱いて寒さから守る。子供が飯を食べられるようになると、丸い石に食事が出る。こうして子供は立派に成長したので、土司も子供を引き取り、蛇が変じた石を山上にあげて祀る。これが「アマトロ」である。

この中国雲南省の伝承と甄萱伝説とを比べてみると、両者はほぼ同じ叙述構成になっているが、②〔苧環〕のところで大蛇の死を述べる点では同じであるが、殺された大蛇が石に変じたという点では違いが見られる。韓国の伝承において、殺された大蛇が石に姿を変

27) 芹原孝守(2003.12)「雲南彝族の三輪山型説話」『比較民俗学会報』第24巻 第4号, 通巻 第118号

える伝承は見えないが、大蛇の跡をつけると、その住まいが巨岩や石とする伝承は多数存在する。このように石と蛇は深い繋がりがあり、石は神の寄りつく場所でもあった。『日本書紀』巻第六の垂仁天皇条では意富加羅国の王子の都怒我阿羅斯等が本国にいたとき、村の祭神である白石をもらい、それを持ち帰って寝室の中に置くと、その白石は美しい乙女の姿になった。乙女は難波に来て比売語曾社の神となり、また豊国の国前郡に来て比売語曾社の神となったと記す。ここでは白石から美しい姫になるので、大蛇が石になるのと逆の発想であると言えるが、比売語曾社のご神体は白石とも言われており、中国の伝承において蛇が変じた石を神として祀る趣向と類似する。また刀で蛇を切る発想は、大蛇と鉄との関連から理解すべきであり、『古事記』では須佐之男命が蛇の尾を切ったとき、中から神剣が表れたとある。大分県姫島の比売語曾社の横には拍子水があり、それは赤い酸化鉄の沈殿した水で、当社は赤水明神ともいわれ、製鉄文化と関連がある。現在でも姫島は黒曜石の産地として有名であるが、他地域の黒曜石は黒色をしているのに対して、姫島の黒曜石は乳白色を呈す神秘的な石である。また姫島は県指定天然記念物に指定された藍鉄鉱石でも有名である。藍鉄鉱石は地中では白色または無色の柱模様の結晶体であるが、これが地表に出て空気と接触すると美しい灰藍色に変わる神秘的な鉄鉱石である。この石は割と柔らかい鉄鉱石なので低い火の温度でも鉄精錬が可能であるといわれている。『日本書紀』所収の都怒我阿羅斯等の伝承において白石が美しい娘に変わったというのは、こうした姫島の独特な自然風土が反映されたものと考えられる。このように石と蛇は鉄の問題と関わっており、中国では湖辺で拾った五色の石は龍が石に化けたもので、明るい光や雷鳴のような音を出し、最後は赤龍が抱きかかえて去るという話が『太平広記』などに見える。中国では水神つまり蛇神や龍神は石や玉(赤珠)の形で現れることもあり[28]、上記の雲南省の伝承において人々が大蛇を刀で切ると、蛇が石に化したというのは、中国古来の石の信仰と関連して考える必要があろう。また、従来韓国の学界では、甄萱に山神の化身と言える虎が来て彼に乳を飲ませて育てたと記す『三国遺事』の記録について、虎に対する韓国人の固有信仰として捉える傾向が強かったといえるが、蛇の子に対して虎が乳を飲ませる伝承がすでに上記の中国の雲南省の苧環型蛇聟入譚に見えるので、甄萱伝説への直接的な影響関係も検討する必要があろう。芹原孝守氏によれば、これに類似した伝承が楚雄市渓山包頭王村にも見られるものであった[29]。

---

28) 項青(2014.3)「東アジアの<卵生神話>の受容考・その一―中国における呑卵型を通じて―」『国語国文学研究』第49号

29) 前掲注27に同じ

昔彝族の娘のもとに、黒龍譚の龍が夜毎通ってきて、娘は身ごもる。これを恥じた娘が生まれた子供を山に捨てたところ、虎が乳を与え、鷹が翼で子供の体を覆う。虎と鷹に守られて子供は勇敢な男に成長し、やがて彝族の王となり、「包頭王」と呼ばれたという。

韓国の甄萱伝説では、甄萱が赤ん坊のとき、父が畑仕事をしていて母がご飯を持っていくために彼を山の林の中におろして置いたところ、虎が来て赤ちゃんに乳を飲ませたとあり、山に捨てたとまでは語っていないが、山に置かれた子供に虎が乳を飲ませ、その子が将来、王になるなど、両者はきわめて類似する。両者の間には直接的な影響関係の可能性が浮上してきたので、今後はどういう文化的背景の中で両者が関連してくるのか、詳しく追及する必要があろう。

7. 韓国の苧環型蛇聟入譚・夜来者説話の諸伝承と伝承様相

管見し得た韓国の苧環型蛇聟入譚の夜来者説話は、次のように四三例である。

	伝承地域	題名	調査者	所収文献	採録日時
1	京畿・驪州	昌寧曺氏の始祖・曺継龍	徐大錫	韓国口碑文学大系 1−2	1979.8.10
2	京畿・議政府	童子蔘	曺ヒウン他	韓国口碑文学大系 1−4	1980.8.28
3	江原・襄陽	亀と結婚した女性	金善豊他	韓国口碑文学大系 2−5	1979.5.15
4	江原・平康	蔡氏沼	崔常壽	韓国民間伝説集	1936.8
5	忠北・忠州	鶏足山由来	金ヨンジン他	韓国口碑文学大系 3−1	1979.5.15
6	忠北・中原	塩田原(ヨンバダ)の由来	金ヨンジン他	韓国口碑文学大系 3−1	1979.4.30
7	忠北・永同	甄氏の由来	金ヨンジン	韓国口碑文学大系 3−4	1982.9.14
8	忠南・大徳	人参の変身	朴ケホン他	韓国口碑文学大系 4−2	1980.2.20
9	忠南・大徳	山参の変身	朴ケホン他	韓国口碑文学大系 4−2	1980.7.29
10	忠南・燕岐	ソウリ山伝説	張徳順	韓国説話文学の研究	1978
11	忠南・扶余	南池	崔常壽	韓国民間伝説集	1935.8
12	全北・南原	甄萱は天上から流配された百足の息子	崔ネオク	韓国口碑文学大系 5−1	1979.7.31
13	全北・南原	蛇婿の復讐	崔ネオク他	韓国口碑文学大系 5−1	1979.8.2

	伝承地域	題名	調査者	所収文献	採録日時
14	全北・沃溝	甄萱はミミズ生まれ	朴スンホ他	韓国口碑文学大系 5－4	1982.8.8
15	全北・井邑	甄萱の誕生	朴スンホ	韓国口碑文学大系 5－6	1984.8.27
16	全南・高興	平康呉氏の始祖伝説	金スンチャン他	韓国口碑文学大系 6－3	1983.8.2
17	慶北・月城	蛤の息子に生まれた子	曺ドンイル他	韓国口碑文学大系 7－1	1979.2.27
18	慶北・盈徳	塩山のミミズ	林在海他	韓国口碑文学大系 7－6	1980.2.28
19	慶北・尚州	甄萱伝説	崔ジョンニョ他	韓国口碑文学大系 7－8	1981.12.1
20	慶北・尚州	ミミズの子・甄萱	崔ジョンニョ他	韓国口碑文学大系 7－8	1981.12.1
21	大邱	ミミズと交わった娘 (釜ができた由来)	崔ジョンニョ他	韓国口碑文学大系 7－13	1983.8.16
22	慶南・居昌	許家の池の話	崔ジョンニョ	韓国口碑文学大系 8－5	1980.5.14
23	慶南・金海	ミミズの息子	金スンチャン他	韓国口碑文学大系 8－9	1982.8.22
24	慶南・蔚州	中国の皇帝になった獺の孫	鄭サンバク	韓国口碑文学大系 8－13	1984.8.2
25	慶南・東萊	針と大蛇	孫晋泰の叔母	韓国民族説話の研究	1923.11
26	慶南・東萊	針に刺された大蛇	崔常壽	韓国民間伝説集	1939.10
27	済州・南済州	金通精将軍	玄容駿他	韓国口碑文学大系 9－3	1981.7.17
28	咸北・会寧	老獺稚	崔常壽	韓国民間伝説集	1933.8
29	咸北・城津	広積寺の蜘蛛	崔常壽	韓国民間伝説集	1936.8
30	咸北・城津		孫晋泰	韓国民族説話の研究	
31	平南・平壌	金の音と蛇	崔常壽	韓国民間伝説集	1936.1
32	ソウル	火種を消した不老草	崔雲植	韓国の民譚	1972.8.16
33	京畿・楊平	火鉢とイタチと金の甕	成ギヨル	韓国口碑文学大系 1－3	1979.7.18
34	京畿・江華	童子になった山参	成ギヨル	韓国口碑文学大系 1－7	1981.8.11
35	忠南・扶余	人参の変身	朴ケホン	韓国口碑文学大系 4－5	1982.2.17
36	忠南・扶余	火種を守った嫁と童子参	朴ケホン	韓国口碑文学大系 4－5	1982.1.29
37	全北・南原	火種と童参と熱女	崔ネオク	韓国口碑文学大系 5－1	1979.8.3
38	全南・新安	年季の入った童参を得た嫁	崔ドクウォン	韓国口碑文学大系 4－5	1984.6.9
39	全南・和順	火鉢の火を消す年老いた未婚の男	崔ネオク	韓国口碑文学大系 6－11	1984.7.27
40	慶北・安東	火鉢の火を消す童参	林在海	韓国口碑文学大系 7－9	1981.8. 4
41	慶南・晋陽	火種と福運のついた嫁	鄭サンバク他	韓国口碑文学大系 8－3	1980.8.10
42	慶南・蔚州	消えた火種のため童参を得た嫁	劉ジョンモク	韓国口碑文学大系 8－13	1984.8.23
43	咸北・鏡城	八代受け継がれてきた火種	任晳宰	韓国口伝説話4	1927.2

以上のように日本の「祖母嶽伝説」と関わる韓国の苧環型蛇聟入譚の夜来者説話は、韓国全土に広く伝承されるものであるが、その四三事例のモチーフ構成と異同を対照表で示すと次のようである。

諸伝承 ＼ モチーフ		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
		①女主人公の名	②女主人公の隔離	来訪者の姿	正体把握方法	来訪者の居住地	①来訪者の死	Ⅱ蛇の子誕生予言	来訪者の正体	始祖誕生	蛇の子孫の印
1	京畿・驪州	○無男の一人娘。衰弱していく。妊娠の気配	×後園の池を見物時スッポン発見	○青衣童子・烏帽子姿	○苧環の糸	池	×	×	○スッポン	○昌寧曺氏の始祖・曺継龍	**○膝の下と脇の下に鱗(継龍)**
2	京畿・議政府	×子供を一人置いて外出	×	○童子参	○苧環の糸	×	×	×	童子参	×お金持ち	×
3	江原・襄陽	○大事な美しい一人娘、妊娠の気配	×	○青い服を着た青年	○苧環の糸	○池	×	×	○大きな亀	亀の子	×
4	江原・平康	婚期を逃した独身の女、妊娠	×	○青い服を着た男	○針と糸	○大きな沼(馬岩沼)	○娘の親が殺す	×	○亀	○始祖・蔡元光誕生。気骨、文武優れる。	**○名字を「蔡」にしたのは、亀に因んだもの**
5	忠北・忠州	○無男の一人娘。婚期を逃す	○別室を使用	○体が冷たい獣	○苧環の糸と針	**○塩田**	○背中を刺され	×	○ミミズ	子の非凡さ、鶏足山由来	
6	忠北・中原	○大臣の娘	○草家の別室	○烏帽子姿の童	○針と糸	○池(父と、下女と)	○塩と針に刺され	×	○ミミズ	**塩田原の由来**	
7	忠北・永同	○無男の一人娘、成人した娘		○烏帽子姿の男、子誕生	○針と糸	○城隍祀	○針に刺され	×	○ミミズ	黄澗甄氏の始祖	×
8	忠南・大徳	×子供を一人置いて外出	×	×	○苧環の糸を髪の毛に括る	人参畑	×	×	○人参	×お金持ち	×
9	忠南・大徳	婚期を逃した娘	離れで暮らす	○美しい若者、烏帽子姿	○苧環の糸と針	×	×	×	○人参	×	×
10	**忠南・燕岐**	○ソウリ山の麓の娘	×	○正体の知れない男	○糸と針	○ソウリ山の頂上	○針に刺され	×	**○大蛇**	○貴公子、**村の守護神**	

モチーフ / 諸伝承		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
		①女主人公の名	②女主人公の隔離	来訪者の姿	正体把握方法	来訪者の居住地	①来訪者の死	Ⅱ蛇の子誕生予言	来訪者の正体	始祖誕生	蛇の子孫の印
11	忠南・扶余	○武王の母、寡婦	×	○赤い服、姓名を言わない男、妊娠の気配	○苧環の糸と針	○南池	×	×	**○魚竜**	男の子・薯童、非凡さ、武王	
12	全北・南原	○美しい婚期を迎えた娘。姦夫の噂	×	○紫色の男	○苧環の糸と針	○辟村の山の麓の窟	○針に刺され	**○お腹に子供があると予言**	○百足	○甄萱誕生、以下虎の養育	
13	全北・南原	○**女が登山し、小便**	×	○青年、妊娠	○糸	**○登山して小便した場所**	×人から大蛇変身	×	**○大蛇**	**○大蛇誕生、自分の前世を語る**	**★丹塗矢説話を連想**
14	全北・沃溝	○寡婦で高貴な娘	×	○容顔の美しい男。妊娠	○糸	○醤油などの貯蔵庫	×	×	○ミミズ	○後百済の始祖・甄萱	
15	全北・井邑	○無男の長者の一人娘、夫の噂	×	×正体のわからない男	○苧環の糸と針	○裏山	○針に刺され鉄の毒で死ぬ	**○朝鮮の王になる**	○大きな猪	○甄萱	
16	全南・高興	○許氏の娘で婚期を迎える。妊娠の気配	×	×	○苧環の糸と針	○池	○針に刺されさらに殺す	×	○大きなスッポン	○貴公子誕生、非凡さ。平康呉氏の始祖	
17	慶北・月城	○婚期を迎えたあるお金持ちの娘、ハンセン病	×	○若者、住所を聞いても教えてくれない。妊娠	苧環の糸と針	○池	×	×	○蛤(人形に変身して通う)	○家に置くと男の子誕生、非凡さ。曺氏の始祖	★住所を教えない趣向と変身は日本書紀に近似
18	慶北・盈徳	○お金持ちの家の娘	○離れで暮らす	○烏帽子姿の若者、妊娠	糸と針	**○塩山の石の下**	○針に刺され**塩水で殺す**	×	○ミミズ	×**薬を呑んでミミズの子を降ろす**	★日本の昔話に近い。ミミズと塩との関連
19	慶北・尚州	○天安山城の庵に婚期を逃した女	×	×男、妊娠	紡糸と針	○山の麓の藪の中	○針に刺され	×	○ミミズ	○甄萱誕生、非凡さ、王建との戦い	
20	慶北・尚州	○針をする女	×	○烏帽子姿	○紡糸を括る	×	○針に刺され	×	○ミミズ	○ミミズの子・甄萱	

諸伝承＼モチーフ		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
		①女主人公の名	②女主人公の隔離	来訪者の姿	正体把握方法	来訪者の居住地	①来訪者の死	Ⅱ蛇の子誕生予言	来訪者の正体	始祖誕生	蛇の子孫の印
21	大邱	金進士家の婚期を逃した娘、痩せて行く	×	○青い胴衣を着た若い青年	○苧環の絹糸と針	○大きな岩	○針に刺され、鉄を溶かす釜に入れられる	×	○ミミズ	○朝鮮釜の由来	
22	慶南・居昌	○洪川のお金持ちの許氏の娘	○秘蔵の娘で山村では婿になる人無し。痩せていく	○青い服を着た男、**娘が正体を追及**	○苧環の糸と針	○大きな池	×	×	○スッポン	○貴公子誕生、許氏池の由来	**★秘蔵の娘→源平盛衰記に近い**
23	慶南・金海	○大臣の娘、お腹が大きくなる	×鳥も飛んで通れないほど	○藁の束のようなもの	○苧環の絹糸	○谷の岩の中	○刀で殺す	×	○ミミズ	○ミミズの子誕生、**父無し子の父探し**、祖父に仕返し。針を抜いてやる	★常陸国風土記や山背国風土記所引の賀茂社の縁起に近い
24	慶南・蔚州	○豆満江の辺、十八歳の娘	○一人で住む	○夢の中で童子	○苧環の絹糸と針	○岩穴	○針に刺され	×	○川獺	○男の子誕生。その子が結婚して生んだ子が中国の天子	
25	慶南・東萊	○お金持ちの家の無男独女	×	○美しい男、体が冷たい	○絹糸一梱と針	○山中の大きな窟中	○鱗を下から刺され		○大きなウワバミ。	×鉄と蛇は相剋だから死ぬ	
26	慶南・東萊	○お金持ちの家の一人娘	×	○美しい少年	○苧環の糸と針	○裏山の林の中の大きな窟	○針に刺され、遺体を燃やす	×	○**大蛇**	×	
27	済州・南済州	○お金持ちの家の大人しい娘	○離れで住み、男が近寄れないように	○坊ちゃん	○絹糸	○大きな岩の下	○殺す	×	○ミミズ	○金通精将軍の由来	○体に鱗、鱗の隙間を刺され死ぬ
28	咸北・会寧	○李座首の一人娘	×大事に育てる。二十歳で妊娠	×正体のわからない青年	○苧環の糸	○豆満江の辺の池	○殺して埋める	×	○**川獺**	○男の子・名を老獺稚、結婚して生まれた子が清国の太祖	

諸伝承 ＼ モチーフ		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
		①女主人公の名	②女主人公の隔離	来訪者の姿	正体把握方法	来訪者の居住地	①来訪者の死	Ⅱ蛇の子誕生予言	来訪者の正体	始祖誕生	蛇の子孫の印
29	咸北・城津	○広積寺の蜘蛛が娘に変身	×突然妊娠	○正体のわからない美しい男	○苧環の糸と針	○山中の池	×	×	**○龍**	○男の子・非凡さ、清国の天子	
30	咸北・城津	○広積寺の蜘蛛が美少女に変身	○別室で養育、妊娠	○正体のわからない童子	○苧環の糸と針	○大沼の中	○鱗が刺され、殺す	×	**○龍**	○男の子・逃げて清国の天子	
31	平南・平壌	○金座首・お金持ちの一人娘	×	○美しい青年、青い服、王子のような冠	○鐘突きに鐘を鳴らせる	池	×逃げる	×	**○大蛇**	×	鐘は夜明けを知らせる
32	ソウル	○嫁に火種を守らせる	×	○火に小便、赤い物体	○絹糸と針	○山の藪の中	×	×	○不老草	×国から孝行賞	
33	京畿・楊平	○嫁に火種を守らせる	×	○イタチ	○苧環の糸	○藪の中	×	×	○金の甕が三つ	×、三代火を守ったお陰で発見	
34	京畿・江華	○嫁が火種を管理	×	○小さい童子	○糸と針	×	×	×	○山参	×	
35	忠南・扶余	○嫁が火種管理	×	○ある者が小便	○苧環の糸と針	○垣根の下	×	×	○人参	×お金持ち	
36	忠南・扶余	○三代受け継がれの火種を嫁が守る	×	○狐、火種を消した責任で悩む	×	○裏山の城隍祠	×	×	○童子参	×国から賞をもらう」	
37	全北・南原	○娘が嫁入り	×	○青い胴衣を着た人が小便	○苧環の糸	○裏山の岩下	×	×	○童参	×病人の夫を回復させる	
38	全南・新安	○長男の嫁、火を消す	×	×	苧環の糸	○裏山の石	×	×	○童参	×お金持ち	
39	全南・和順	○嫁が火鉢を持参	×	○独身の男、火鉢に水をかける	○糸と針	○南山	×	×	○童参	×お金持ち	
40	慶北・安東	○両班の家の嫁	×	○胴衣を着た人が火を消す	○苧環の絹糸と針	×	×	×	○童参	×お金持ち	

モチーフ / 諸伝承		Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
		①女主人公の名	②女主人公の隔離	来訪者の姿	正体把握方法	来訪者の居住地	①来訪者の死	Ⅱ蛇の子誕生予言	来訪者の正体	始祖誕生	蛇の子孫の印
41	慶南・晋陽	○嫁、火を守る	×	○お化け(トケビ)のような者、小便をかけて火を消す	○訪問者を追跡、松の枝で印(山の場所)	○山	×	×	○金の塊り	×お金持ち	
42	慶南・蔚州	○嫁、五代受け継がれる火	×	○間抜けの鉄杖を持った人	×そのまま訪問者を追跡	○山の崖	×	×	○山参	×お金持ち	
43	咸北・鏡城	○嫁、七代受け継がれる火を監視	×	○青い服を着た女	○苧環の絹糸	○山越えの岩	×	×	○人参	×お金持ち	

上記のように、美しい娘のもとに大蛇の化身である素性の知れない不思議な男が夜な夜な通いつめ、やがて娘は身ごもり、その娘から英雄などが誕生したという韓国の苧環型蛇聟入譚の夜来者説話は、Ⅰの①〔女主人公の名〕②〔女主人公の隔離〕、Ⅱ〔来訪者の姿〕、Ⅲ〔正体把握方法〕、Ⅳ〔来訪者の居住地〕、Ⅴ①〔来訪者の死〕②〔子誕生予言〕、Ⅵ〔来訪者の正体〕、Ⅶ〔始祖誕生〕、Ⅷ〔蛇の子孫の印〕の九つのモチーフが抽出できるものである。そこで韓国の夜来者説話の資料を紹介しながら、日本の苧環型蛇聟入譚と関わってその伝承様相について詳しく論じてみたい。

7.1 女主人公の名、女主人公の隔離

蛤の息子に生まれた子30)

これは曺(チョ)氏の始祖の話であるが、あるお金持ちの家に婚期を逃した一人娘がいた。ところがその娘はハンセン病に侵され、村から離れたところに家を立てて住ませた。ある晩、娘が寝ていたところに正体のわからない若い男が訪ねてきた。そのように一晩を過ごし、明け方に帰るのを毎日繰り返すのであったが、正体を聞いても男は答えなかった。そうするうちに娘は身ごもり、体の状態も回復してきた。母が不思議に思って聞いてみると、娘は今までのことを話し出した。娘は母に苧環を用意してくれと頼み、泊って帰る男の上着の後ろ側の裾に針を刺して置いた。翌朝、苧環の糸を辿ってみると、池の中に入っていた。その糸を手繰り寄せると大きな蛤が付いて出てくるのであった。その蛤を持ち帰って家に置いた。その後、娘は男の

30) 韓國精神文化研究院語文研究室編(1994)『韓國口碑文學大系』7－1

子を生んだが、才能に優れ、体の風貌が良かった。そこで名字を貝の韓国発音の「チョ」に因んで、曺(チョ)氏とした。

上記のように主人公は、「婚期を逃した独身の女」「婚期を迎えたお金持ちの娘」「お金持ちの家の一人娘」「大臣の娘」などのように高貴な身分で、箱入りの大切な娘として描かれているものが多いが、一つ欠けているのは、女性が婚期を迎えたとか、婚期を逃したとかなどと語る点である。これは娘と夜来者との交わりやそれによる妊娠はある程度までは仕方がないという設定であろう。②〔女主人公の隔離〕は、18・22・27・30などに見られるものである隔離する理由としては、「ハンセン病に侵され、村から離れたところに家を立てて住ませた」とか、他に「秘蔵の娘なので山中の離れで一人住まいをさせ、男が近寄れないようにしたりする」とかである。これは日本の『源平盛衰記』と『延慶本』において、父親が娘を秘蔵して後園に屋敷を作り、一人暮らしをさせ、外部から男が侵入できないようにしている叙述に近いが、これは却って正体の知れない男の一方的な訪問と、二人が交わるきっかけを提供している。

7.2 来訪者の姿

蔡氏沼[31)]

昔、平康郡楡津面にあるお金持ちが住んでいたが、その家には婚期を逃がした娘が一人いた。ところが不思議なことに娘は男と接触したことがないのに身ごもったのである。親がびっくりして聞いたところ、娘は、「不思議にも毎晩青色の衣を着た男が私の部屋を訪ねて来て、泊って帰るのでどうしようもなく、住所や名前もわかりません」と言う。その話を聞いた親は、針に糸を通して娘にやりながら、「もし今晩、その男が訪ねてきたら何も言わず、その男の裾に刺して置け」と指示した。親の言う通りにして、翌朝その糸を辿っていくと、村の前にある大きな沼である馬岩沼というところに入っていた。そこで親が糸をゆっくり手繰りあげると大きな亀が出てきた。親は娘を身ごもらせたのが亀であることを知り、その亀を沼に戻した。その後、娘は男の子を生んだが、気骨が普通ではなかった。大きくなるにつれ文武も他の人より優れ、朝廷ではこの噂を聞き、大臣に任命したが、この人が「蔡元光」という人である。名字を「蔡」にしたのは、亀に因んだものであり、名を「元光」としたのでその亀が光ったことに由来するが、この人が平康蔡氏の始祖であり、この理由により亀が住んでいた馬岩沼を蔡氏沼に改めたという。

31) 崔常壽(1984)『韓国民間伝説集』通文館

このように来訪者の姿は、「青い服を着た男」となっているが、他の伝承では「烏帽子姿の男(童子)」「美しい男」「紫(赤)色の男」などのように多様である。この中で主流をなしていのは、「烏帽子姿の男(童子)」と「青い服を着た男(童子)」である。これは夜の来訪者が高貴な身分で異界から訪ねてきたことを表すものであり、日本の『源平盛衰記』と『平家物語』において、正体の知れない男が立烏帽子の「水色の狩衣」の姿で夜な夜な訪ねてくる趣向に近いものである。また、前述のように「水色の狩衣」を着た男は、金属採掘と関わる人物と考えられるものであるが、韓国の伝承でも男の服装の青色とは「酸化した鉄の色」を意味するものであり、男の正体が製鉄と関連する人物であることを示す。このように製鉄と関わる男は多様な姿で姫のもとに通うものであるが、次の事例は、火の信仰と関わり、来訪者を「婚期を逃した男」とするものである。

火鉢の火を消す年老いた未婚の男32)

昔は嫁に行くとき、御輿に火鉢を持参し、その火を消さないで代々継がせるものであった。ある女が嫁に来るとき、火鉢を持ってきたが、夜中になると誰かが訪ねてきてその火を消してしまうのであった。そこで寝ないで監視していると、真夜中に年老いた未婚の男が部屋に入ってきて、火鉢の火に水をかけて帰るのであった。女は針に糸を通してその男の服の後に刺して置いた。次の日の明け方、彼女の夫を起こしてことの事情を説明し、糸を辿ってみた。糸は南山のところまで続いており、そこに行って見ると、岩の下に童参があった。そこで女は誤解を解かれ、お金持ちになって良い暮らしをした。

火種を消した不老草33)

昔、李進士の家で嫁を迎えたが、その嫁に三代・十一年目に入る火種の入った火鉢を引き継がせ、管理させた。ところが、毎晩ある赤い物体が訪ねてきて、火鉢に小便をかけて、火を消して出て行くのであった。嫁は針に苧環の糸を通してその赤い物体に刺して置いた。後を付いて行ってみると、山の藪の中に入っており、ある草の葉っぱに針が刺さっていた。その葉っぱは実は不老草であったが、それを掘りだして病中の義姉に飲ませると病気がすっかり治った。それによって嫁は国から孝行賞をもらった。

32) 前掲注30『同書』6－11
33) 崔雲植(1987)『韓国の民譚』詩人社

上記は、「年老いた未婚の男」や「ある赤い物体」が代々引き継がれてきた火種を守ろうとする嫁のもとに毎晩通い、小便をかけて火種を消す。そしてその正体を知るため、刺して置いた苧環の糸を辿って行った嫁に富をもたらしたというものである。このように来訪者が「嫁の守る火鉢に小便をかけて帰る行為」をどのように理解すれば良いのであろうか。ここでの小便をかける行為は、女性との性行為を間接的に示すものであり、その二人の間接的な結合は、結末のところで子の誕生を述べる代わりに、女性の嫁ぎ先に富(黄金)をもたらすという展開となっている。火神の女性と水神の大蛇(人参)との交わりによって、黄金(富)を誕生させるこの説話の背景には、鍛冶の仕事に従事する鋳物師や鍛冶師などの存在が見え隠れていると言える。女性が火の神、来訪者が蛇、二人の結合が黄金をもたらすというこの展開は、初代天皇・神武の大后の出自を伝える『日本書紀』の「神武記」に見られるものである。三島溝咋(みぞくい)の娘で、名は勢夜陀多良比売が美しかったので、美和の大物主神が見染めて、その美人が大便をするとき、丹塗矢に化して二人が結婚、その間で誕生したのが「富登多多良伊須須岐比売命」であり、またの名は「比売多多良伊須須気余理比売」で、この女性が神武天皇の妃となったのである。ここでの「多多良」とは鍛冶場で火を起こす時に使う蹈鞴のこと。大蛇として象徴される大物主神と火神の娘との結合は、上記の韓国の伝承にも響く問題であった。

7.3 正体把握方法

ミミズと交わった娘(朝鮮釜の由来[34])

昔、(慶尚北道)清道郡雲門面ソルゲ洞というところは、朝鮮釜、その伝説ができた謂れは、昔、金進士の家に婚期を逃した娘が一人いたが、なぜかだんだん痩せていくのであった。親が不思議に思って聞くと、「夜毎、青い道袍(胴衣)を着た若い青年が私の部屋を訪ねて来て、交わり行為はないが、明け方になると帰るので痩せてくる」というのであった。すると親は苧環の絹糸を針に通してやりながら、「今夜訪ねて来たら胴衣の後の方に刺して置け」と言った。翌朝、親と一緒に糸を辿って行くと、ミミズ岩という大きな岩に藁束のような巨大なミミズが横になっていた。村人は鉄を溶かして、(朝鮮)釜を作り、ミミズを捕まえて来て、釜の中に入れて殺した。それ以降は、ここで鉄を溶かして朝鮮釜を作るのが絶えなかった。昔からの謂れとして老人から聞いた話だが、今は歳も過ぎ釜作りもなくなり、その伝説も消えてしまったのである。

34) 前掲注30『同書』7－13

上記のように来訪者の正体が気になった親は、その正体を明かすための手段として、苧環の糸と針の道具を使う。糸と針がセットで登場するのが主流をなしているが、糸だけを使い、男の体に巻いて置く場合もある。では鉄神の象徴ともいえる大蛇の訪問と、その大蛇に糸を通した針を刺して置き、その糸をつける大蛇の居住地が大岩であったというこのサイクルを苧環型蛇聟入神話と関連して、どのように理解すれば良いのであろうか。韓国の『三国遺事』所収の「延烏郎と細烏女」説話では、鉄神の象徴される延烏郎と機織娘の細烏女が新羅を離れ日本に行くと、新羅は光がなくなり、真っ暗な状態になった。そこで細烏女が織った布で祭りを行うと元通りに戻ったと言う。このように鉄と機織は関連があると言えるが、日本の福島県相馬郡、宮城県玉造郡、岩手県遠野市などの伝承では、鉄神の化身と考えられる蛇が機織りをしている娘のもとに毎晩通っている[35]。韓国の忠清北道鎮川郡石帳里遺跡では、二基の製鉄関連遺跡が見つかっているが、この地域は初期の百済時代の鉄生産の拠点とされたところである。そこは鉄生産の遺跡にも関わらず、糸を紡ぐ(糸を練る)ときの道具の紡錘車が大量に出土されている。紡錘車には鉄製のものもあり、鉄製品とともに服と関連する紡錘車が祭祀対象物として使われた可能性がある。食べ物の供物に使用された土器とともに紡錘車が統一新羅時代の墓に副葬品として埋蔵され、忠清北道忠州のルアム里古墳では、赤色の紡錘車が出土された[36]。また慶尚南道昌原郡茶戸里の古墳[37]や福岡県乙隈(おとぐま)天道町の遺跡からも紡錘車が出土された[38]が、尹鍾均氏によればこれも祭祀用品として考えられるものであった[39]。また巨岩は神の宿る寄代である。こう見ると苧環型蛇聟入譚は祭りに置いての神話の再演ではないだろうか、それが記録として祖母嶽神話や三輪山神話の形で伝わっているのではないかと考える。『日本書紀』崇神紀天皇七年二月条には、大物主神が倭迹迹日百襲姫命(妻)に乗り移って天皇に託宣している場面が描かれているが、ここで倭迹迹日百襲姫命は神がかりする巫女、大物主神は大蛇で鉄神的存在であると言えよう。日本の昔話の方では姫が機織りする娘となっていること、鉄生産の遺跡からは糸を紡ぐ(糸を練る)ときの道具である紡錘車がたくさん出土しているのをみると、苧環型蛇聟入譚はおそらく巫女が蛇神であり鉄の神を迎える祭儀において生きた神話として機能した時期があったことが考えられる。

---

35) 前掲注9に同じ
36) 尹鍾均(1998)「古代鉄生産に関する一考察ー中南部地域の考古学的成果を中心にー」全南大学大学院修士学位論文
37) 李健茂・尹光鎭・申大坤・鄭聖喜(1995)「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告Ⅲ」『考古学誌』7 韓国考古美術史研究所
38) 川越哲志(1993)「板状鉄斧」『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版
39) 前掲注36に同じ

7.4 来訪者の居住地

ミミズの子[40)]

昔、ある大臣の家に娘が一人いたが、なぜか娘のお腹が大きくなるのであった。大臣が娘を呼んで理由を聞くと、「風が吹くと窓が開き、藁の束のようなものが入ってきて横になって帰る以外は心当たりがない」と答える。すると大臣は「苧環の絹糸を用意して置いて、藁の束が入ってくると刺して置け」と言った。大臣の言う通りにして、翌朝、大臣が下男下女を連れて糸の後をつけると、谷の岩の中に入っていた。中を見ると大きなミミズがいた。大臣は怒ってミミズを刀で殺した。娘は後で男の子を生んだが、その子が大きくなると、周りの子供から「父無し子」と言われる。母親から父の居場所を言われ、父親を探して谷間の岩のところに行った。そこで大きなミミズを見つけ、「お父さん」と呼んで、体を掴むと、ミミズがその場で縮みながら刺さった針がさらっと抜けた。その後、息子は父の仇である祖父を殺したという。

南池[41)]

百済の三十代の王は武王である。彼の母は寡婦で、都の南池のほとりに家を建てて住んでいた。ところが夜毎、赤色の衣を着た名前も知らない美しい男が訪ねて来て一緒に泊って、夜が明ける前に帰るのであった。寡婦は恥ずかしく、人に知られるのを恐れ、このことを人に打ち明けることができなかった。しかし体に異変が生じ、お腹も大きくなってき、いつまでも隠すことができなかったので、実家の父にすべてを打ち明けた。すると父親は、「今夜、男が訪ねてきたら苧環の糸を針に通して、帰る時に衣の裾に刺して置け」と言った。父親の言う通りに衣の裾に針を刺すと、男は驚いて慌てて逃げてしまった。翌朝、その糸を辿っていくと南池のなかに入っていた。寡婦が不思議に思って、その糸を手繰り寄せて見ると、魚竜が出てきたが、腰の方に針が刺さっていた。その後、寡婦は男の子を生んだが、大きくなるにつれ、才能に優れ、度量が計り知れず、いつも薯を掘って生計を立てていたので、国の人々は彼を「薯童」と呼んだという。

上記では来訪者の居住地が「谷の岩」「南池」となっているが、韓国の諸伝承に表れた来訪者の居住地は、１)池や沼とするものが1・3・4・6・11・16・17・22・28・29・30・31、２)巨岩や石、窟穴とするもの4・12・18・21・23・24・25・26・27・37・38・43、３)山と山の藪中とするもの10・13・15・32・33・39・41・42、４)村の神を祀る裏山の城隍祀とする

40) 前掲注30『同書』8－9
41) 前掲注31『同書』

もの7・36、５)その他のもの(8の人参畑)に分類できるものであった。全体としては、『源平盛衰記』『平家物語』などに見える「巨岩や石、窟穴」とするものや、『肥前国風土記』において「褶振峰の沼」と述べる趣向に近い「池や沼」とする伝承が多いことがわかる。４)は神の宿る祠となっているのが特徴であるが、これは『古事記』の三輪山神婚説話に見える「神の社」とする叙述に近い。３)は正体不明の男の居住地を山とするもので、『日本書紀』や『常陸国風土記』『新撰姓氏録』の記す、男の正体が「三諸山(三輪山)」となっている伝承に類似する。

7.5 来訪者の死、蛇の子誕生予言

針と大蛇[42)]

昔、ある金持ちの家に男の子はなく、一人の娘がいたが、毎晩、美少年が訪ねて来て一緒に寝て鶏が鳴くと忽然と姿を消すのであった。家を出入りする時に門の障子も破れたところがなく、部屋の窓紙にも小さい針穴ひとつも見えなかったので、どのように出入りするのか、知る方法もなかった。何度も住まいと氏名を聞いたが、返事をしてこないものであった。そればかりではなく、男の体は冷気が漂っており、邪悪なものかも知れないと思い、避けようとしたができなかった。そうするうちに娘の体に異常が生じた。ある日、娘の父が家中を巡回していたところ、娘の部屋の窓に男の影が映っていたので、翌朝、娘にそのわけを聞いたところ、以上のような事実がわかったのである。娘は父親の指示通り、苧環の絹糸を針に通して置き、その日の夜、少年が訪ねた時にこっそりと襟元を刺した。そうすると少年は驚いて逃げ出した。翌朝糸を辿って見ると、裏山の洞窟の中に大蛇一匹が針に刺されて死んでいた。鉄と蛇は相克だから小さい針に刺されても蛇は死ぬものであり、娘はその後、蛇の子供を生んだという。

上記で娘のもとに通った男の正体が大蛇であり、その大蛇が針に刺さって死んだと、大蛇の死を述べている。韓国の伝承は、先ずは大蛇やミミズの、１)死を述べるものと、２)死を述べないものとに分類ができ、１)死を述べるものは、A)針に刺され死ぬもの、B)針に刺され、蛇(ミミズ)を親などが殺すもの、とに分類できる。１)死を述べるものの、A)針に刺され死ぬものには5・7・10・12・15・19・20・24・25があり、B)針に刺され、蛇(ミミズ)を親などが殺すものには、4・6・16・18・21・23・26・27・28・30がこれに属する。２)死を述べないものには1・2・3・8・9・11・14・17・22・29・30・31・32~43の伝承がある。これを見ると韓国の伝承は、死を述べるものと、死を述べないものがそれぞれほぼ半分の割合を占めている。韓国の「針に刺され死ぬもの」は、日本の『源平盛衰記』の伝承に近く、

42) 孫晋泰(1982)『韓国民族説話の研究』乙酉文化社

２)死を述べないものは、『古事記』『平家物語』『新撰姓氏録』の伝承に近い。また針に刺されたにも関わらず、それで終わることなく、さらに娘の親が塩水や鉄を溶かす釜に入れたり、遺体を燃やし、刀で来訪者を殺したりする趣向は、韓国の伝承の特徴といえるが、日本の徳島県名西郡(みょうざいぐん)では、娘が生んだ蛇の子に熱湯をかけて殺したり、宮城県遠野市では親蛇を鎌で殺したりするので一概には言えない[43]。日本の昔話の場合、子供の父親である蛇を直接殺すという方法はあまり取らず、単に針に刺されて死ぬという、叙述を見せるのが主流をなしている。親が糸を辿って行って蛇の親子の会話を立ち聞きする趣向は、韓国には見られない日本的な特徴である。15の伝承では針に刺され、鉄の毒で死んだとあり、25の伝承では鉄と蛇は相克だから針に刺されてすぐ死ぬと語っているが、これは先ほどの鉄を溶かす釜に入れてミミズを殺したり、刀で来訪者を殺したりする伝承にも響く。大蛇がなぜ鉄の毒で死ぬという設定となっているのかについての問題であるが、前述した大蛇の化身としての男が着た「水色の狩衣」は、鉄の酸化した色で、大蛇はすなわち鉄人そのものであり、『源平盛衰記』では大蛇を「眼は銅(あかがね)の鈴を張るが如く、口は紅を含めるに似たり」と描かれているように、大蛇は鉄と関連するものであった。また、『古事記』では、須佐之男命が大蛇の尾を切るとき、中から神剣の草薙太刀が表れたとあり、大蛇と鉄とは関連が深い。そこで大蛇は鉄そのものであることがわかり、大蛇が鉄の毒によって死んだというのは、大蛇を邪悪なものとして看做すよりは、大蛇の犠牲によってより良い鉄を誕生させる意味が込められているといえよう。下原重仲(1738~1821)という鉱山師が記した『鉄山秘書』には、金屋子神の屍骸を神の託宣により、タタラの柱に立てかけると、鉄がよく吹けたとあり[44]、韓国の「エミレの鐘」では、村の娘が鉄を溶かす溶鉱炉に飛び込むと良い鐘ができたという[45]。後の時代になるとこの考えが崩れて民間では蛇を邪悪なものとして節句の菖蒲湯や菊酒、桃酒などを飲ませておろすという伝承が生まれたと考えたい。

甄萱は天上から流配された百足の息子[46]

新羅時代のある家に婚期を逃した娘がいたが、親が結婚させようと聞いてみても娘は返事を

43) 前掲注9に同じ
44) 森浩一(1974)『日本古代文化の探求』社会思想社
45) 福田晃・金賛會・百田弥栄子編(2011)「韓国の炭焼長者ーシャーマンと鉄文化との関連からー」『伝承文学比較双書　鉄文化を拓く炭焼長者』三弥井書店
46) 前掲注30『同書』5－1

しないのであった。それによって娘には男がいるので嫁に行かないのではという噂が立った。父が娘に噂は本当かと聞いたら、娘は次のように答えた。離れで寝ていたら紫の衣を着た男が鍵をかけて置いても入ってきて肩を叩き、声を出したら息を吹き込んで気絶させ、それが一年も続いているということであった。娘の話を聞いた父は、苧環の糸を針に通して娘に渡しながら、「男が訪ねてきたら紫の衣に刺して置け」と言った。娘は父の教え通り、男の衣に針を刺した。そうすると男は驚きながら、「自分は天上から降りてきた者で、これからお腹に子供ができるけど耐えられるか」と言って、どこかへ消えるのであった。翌朝父が娘を連れて糸を辿って山に行ってみると、洞窟があり、その中に入ってみると、大きなムカデが針に刺されて死んでいた。娘はだんだんお腹が膨らみ息子を生んだが、それが後百済の始祖・甄萱である。

甄萱の誕生[47)]

甄萱は全羅南道の光州で生まれた。彼の母が独身のときのことである。彼女は金長者の一人娘で、嫁に行こうともせず、親も大切な一人娘なので嫁に行かせようとしなかった。そこへ毎晩男が泊って帰るのであった。親は娘に噂は本当なのかと聞くと、娘は毎晩、正体不明の男が泊って、明け方には風のように去っていくというのであった。そこで親は二度と男が訪ねて来ないように針に糸を通して渡し、もしその男が来たら襟元に刺して置けと指示した。親の言う通りに衣に針を刺すと大きな金の豚が出て行ってしまうのであった。出て行きながら、「お前のお腹の子供は天下の王、三韓の王になるところであるが、このように私を刺し殺したので、一国の王しかなれないであろう」と予言した。翌朝糸を辿ってみると裏山の洞窟中に入っており、よく見ると大きな金の豚が針に刺されて死んでいた。襟元に刺すつもりが、間違って臍に刺したのであった。その後、娘は子供を生んだが、それが甄萱である。

上記の「甄萱は天界から流されたムカデの息子」では、娘が父の教え通り、男の衣に針を刺した。そうすると男は驚きながら、「自分は天上から降りてきた者で、これからお腹に子供ができるけど耐えられるか」と言って、どこかへ消えて、糸をつけると、洞窟中に入っており、正体がムカデであったというもので、お腹の子供のことを予言するものとなっている。また「甄萱の誕生」では針に刺された金の猪が部屋を出て逃げながら、「お前のお腹の子供は将来天下の王、三韓の王になるところであったが、このように私を刺し殺したので、一国の王しかなれないであろう」と、王にはなるが、不完全な状態の王になると、子供の将来を予言している。このようにこれから生まれる子供が不完全な者であると予言するの

47) 前掲注30『同書』5－6

は、日本の『源平盛衰記』において、「あなたの腹に一人の男の子が宿った。もし十カ月に生まれれば日本国の大将になれるが、五か月に生まれるので九国の武士しかなれないであろう」と、大蛇が姫に不完全な蛇の血を引く子の誕生を予言する趣向に酷似している。この点では、韓国の伝承は、蛇の子誕生を予言している、『源平盛衰記』に近似していると言えよう。

7.6 来訪者の正体

火種と福運のついた嫁[48)]

ある家に女が嫁に来たが、三年間を守らなければならない火種が夜になるとよくも消えるのであった。そこで嫁は追い出される羽目になり、ある日、寝ないで火を守っていた。その時、あるトケビ(お化け)のようなものが入ってきて、竈の入口に小便をかけて置いて帰るのであった。嫁がそのトケビの後をついて行ってみると、トケビは裏山に上る途中にその姿を消した。消えたところに印をつけて置いて家に帰ってきたが、翌日も火種は消えていた。嫁は自分が見たことを姑に話し、一緒に印をつけた場所に行った。そこの土を掘りだすと中からたくさんの金の塊が出てきた。嫁は福に巡り合い、追い出されないでお金持ちになって良い暮らしをしたそうだ。

これは大歳の火を守る女が火をもらう代わりに棺桶を預かり黄金を得るという、昔話の「大歳の火」に近いものであるが、訪ねて来たものが人間ではない「トケビ(お化け)、であり、その正体が金の塊であったというものである。韓国の伝承は、来訪者の正体によって、1) 動物型と、2) 人参(山参<山の高麗人参>、不老草)・黄金型に分類でき、1)の動物型の場合は、A)ミミズ、B)大蛇・龍、C)その他の動物に分類できる。 1)のA)ミミズの場合は、5・6・7・14・18・19・20・21・23・27、B)大蛇・龍は、10・11・13・25・26・29・30・31、C) その他の動物には1・3・4・12・15・16・17・22・24・28が属する。2)人参(山参<山の高麗人参>・黄金には2・8・9・32~43がある。韓国の場合、来訪者の正体が1)のA)ミミズが多いのが特徴であり、この点は蛇の伝承が殆どと言える日本の伝承と大きく相違している。ミミズは韓国語で「チロンイ」と発音するが、これを漢字で「地龍」と表記する場合があり、漢方でも「地龍」「赤龍」と称し、ミミズの表皮を乾燥させたものを発熱や喘息の発作の薬として使っている。そうなるとミミズの伝承も、大蛇・龍の分類に入れることができる。ミミズは再生力の強いもので体が切れても切れた部分を元通りに再生させる力を持つ。そこでミミズの再生力は昔から不死の力を持った動物として看做された。特に一匹の

48) 前掲注30『同書』8－3

ミミズの体には雌雄の生殖器官が同時に付いており、その神秘さは異類婚姻譚と結び付き、英雄誕生説話を生ませた。それの代表的なものが、苧環型蛇聟入に属する後百済国の始祖由来を語る甄萱神話である。その強力な再生力は、脱皮を繰り返して成長する蛇にも通じる。C) その他の動物としては、スッポン・亀・蛤・川獺のように水と関連するものが多いが、百足や猪の場合もある。スッポンや亀は頭が男性の性器に似ているので、男性の象徴として導入されたものと考える。百足や猪の場合も体が細いイメージがあり、男性のシンボルとして使われたものと推測される。32~43は、来訪者の正体が山参(山の高麗人参)や黄金で、山参(人参)の場合は赤みのある、細い形は男性のシンボル、また、前半の何代も引き継がれてきた火種を大事に守る、嫁への補償として導入されたものであろう。韓国では黄金を得る伝承よりは、山で自生する高麗人参の山参を得る伝承が多いのは、万病統治や長寿の薬として高値の付く山参に対しての韓国人の意識が反映されたものと考えられる。

また上記の伝承は日本の「大歳の火」に近似するものである。これは大歳の火種を大事に守る女がいたが、ある日火種が突然消えてしまった。困った末に女が外を見ていると、提灯を持った人が近寄って来る。その人に火をもらう代わりに棺桶を預けられた。棺桶を取りに来るという約束の三日が過ぎても来ないので主人が開けてみると小判が出てきたというもので[49]、苧環の糸と針が登場しない点では苧環型蛇聟入譚と大きく相違するが、火種を大事に守る女が小判を得てお金持ちになる点では一致している。火と死と金属のモチーフを含む、この話は鋳物師の伝承と関係があろう。先ほど触れた『日本書紀』の初代天皇神武の大后の出自を伝える「神武記」の火の神と考えられる勢夜陀多良比売と、大蛇として象徴される大物主神と火神の娘との結合は、韓国の説話において、火種を守ろうとする嫁と、男性の性器の象徴とされる山参(人参)との結合、それによる黄金(山参)の発見という叙述に通じるもので、この説話の背景には金属技術を持った製鉄集団が見え隠れていると言えよう。

7.7 始祖誕生

金通精将軍[50](父蛇殺害・始祖由来型)

高麗時代の時である。あるところに寡婦が住んでいたが、日に日に腰の周りが太くなっていった。村人は夫もない人が子供を持ったと噂をした。寡婦は事実を打ち明けなくてはいけないと思って、村人に、「毎日窓の鍵を閉めて寝ているのに、どこから入ってくるのか、ある男が訪ねて来て一緒に泊って帰る」と言った。村人は、「その男が訪ねた時に、糸を体に括って置け

49) 「大歳の火」(前掲注９『同書』所収)。宮崎一枝「大歳の火」(前掲注12『日本昔話事典』所収)
50) 玄容駿『済州島伝説』(西門文庫、一九九六)

ば正体がわかるだろう」と教えた。村人の教え通り、男の腰に糸を括って置いた。翌朝、糸は窓の穴を通じて外に出ており、家の礎石の下に入っていた。その礎石を持ちあげて見ると糸に括られたミミズが中にいた。寡婦は気味が悪くなり、ミミズを殺した。寡婦はだんだんお腹が大きくなり、可愛い男の子を生んだ。男の体の全身には鱗が散りばめられており、脇には小さい羽が付いていた。村人は男の子がミミズと交わって生まれた者だとして、ミミズの文字に因んで「ジントンソン」と呼んだ。この人が金通精将軍であるが、彼は弓を良く射り、空を飛びまわり、呪術を使う人だった。それで三別抄軍の大将軍になった。

これは、寡婦に通った男の正体がミミズで、そのミミズを殺したが、彼女から子供が産まれたというものである。また男の体の全身には鱗が散りばめられており、脇には小さい羽まで付いていた。そこでミミズの文字に因んで「ジントンソン」と呼び、後で彼が三別抄軍の大将軍になったというもので、『源平盛衰記』に近い叙述となっている。このように、ミミズや蛇・龍などの血を受け継いだ子供が一族や国の始祖、あるいは将軍、村の守護神になるというものであるが、これは前述の『日本書紀』や『肥前国風土記』以外の日本のすべての伝承にも見えるものであった。

塩田原の由来[51](地名由来型)

昔、忠州地域でチリ王が王につきたいという話があったそうだが、その話を尋ねれば次のようである。昔、ある大臣の家で草家を建てて、そこで娘の勉強をさせたが、夜中になると烏帽子姿の童が訪ねて来て、意地悪をして帰った。娘がその正体を聞いても答えがなかったので、その行方を知るため、針に糸を通して童の道袍(胴衣)の裾に刺して置いた。翌朝父を呼んで、今まで起きたことを説明し、家の下女たちを連れて糸を辿っていくと、池の中に入っていた。父は下女たちに池の中に塩を撒けと言った。しばらく経つと池の中から大きなミミズが出て来て死んだが、体の後側に針が刺されていた。そこでミミズを池の中に埋めてそこを塩田(塩海)と呼んだ。

鶏足山由来[52](地名由来型)

昔、鶏足山の麓に老夫婦が住んでいたが、男の子はなく、一人娘と住んでいた。娘が婚期を迎え、別の部屋を使わせたが、親が見ると娘の部屋に誰かが寄って帰るようであった。娘に聞

51) 前掲注30『同書』3－1
52) 前掲注30『同書』3－1

くと、「人なのか獣なのかよくわからない」と言う。親は苧環と針をやりながら、泊って帰る人に刺して置けと言った。ある晩、娘の部屋の窓が開き、体の冷えた獣がお腹に這い上がってきたので親の指示通り、背中に針を刺して置いた。翌朝糸を辿って見ると塩田に入っていた。村の村長などがそこの水を外に汲みだしたらミミズ一匹が針に刺されたまま死んでいた。その後、娘は身ごもり、十か月目に子供が生まれた。その子はとても賢く、一つを教えたら十を知り、十を教えたら一〇〇を知るほどであり、体が猛々しかった。力が強かったので岩を抱えて南山に登り、城を築いて戦っていたが、力が尽きるとその塩田に入って浸かって出てきたら強くなり、戦で勝ったりした。そこで隣の村から何百袋ものの塩を運んで塩田に入れ、ミミズの子孫の甄萱が浸かって出てきたところ、体がしんなりとなり、死んでしまった。鶏がミミズを食べているが、二度とミミズのようなものがでてこないように、その山を鶏足山と名付けた。

上記は塩田原や鶏足三の由来を語る「地名由来型」に属するものであるが、「塩田原の由来」は、父と下女たちが糸を辿っていくと、糸は池の中に入っており、烏帽子姿の童の正体がミミズであったというものである。そこで父は下女たちに池の中に塩を撒けと言った。しばらく経つと池の中から大きなミミズが出て来て死んだが、見ると同体の後側に針が刺さっていた。そこでミミズを池の中に埋めてそこを塩田(塩海)と呼んだというものである。源平盛衰記でも、塩田の大夫が登場するが、塩田大夫の塩田は、蛇と塩との関連から導入されたものかも知れない。塩と蛇との問題は次の伝承にも表れている。

塩山のミミズ[53](蛇の子堕胎型)

塩山からミミズが出たといわれる。由緒のある家の娘のところに、烏帽子姿の胴衣を着た美男子が訪ねてくる。不思議に思った娘は、針仕事の糸を男の胴衣の端に巻いて置いた。その後、娘はお腹が大きくなった。娘の様子に気づいた父親が怒って殺そうとすると、娘は、「ある晩、青色の服を着た男が部屋に訪ねてきて、殺すと言われたので仕方がなかった」と答える。二人が糸をつけると、慶州・塩山の岩の下に入っていた。中には千年も過ぎたミミズがいた。そこで釜水に塩を入れて沸かして、その塩水を岩下の溝に撒いた。するとミミズが出て来て死んだ。ミミズは針に刺されていた。娘は薬を飲んでお腹のミミズを下ろした。

これは釜で沸かした塩水を岩下の溝に撒いてミミズを殺し、さらには娘が薬を飲んでお腹のミミズの子を下ろしたという堕胎型に属するもので、韓国ではあまり伝わっていない

53) 前掲注30『同書』7−6

ものである。しかし、日本では菖蒲の湯に浸かったり、菖蒲酒などを飲んだりして宿った子供を降ろすことが語られている昔話が多い。これと関連する伝承として、沖縄県読谷村(よみたんそん)の「3月3日の浜下り由来」では、女が蛇の子供を妊娠していたが、昔からの風習により、3月3日、海辺に行って白砂を踏んだところ、毒蛇の子供が次から次と降ろされ命拾いした」とあり、同県多良間村(たらまそん)の「漲水(はりみず)の神」では「3月3日餅を作って海辺に出て踊ったら降ろされる」といわれ、その通りすると流産した」という[54]。また同県国頭郡大宜味村でも「女が婆に教えられて三月に浜下りをして塩水を浴びると蛇の子が下りた。それから女は三月三日に浜下りをする[55]」とあり、鹿児島県大島郡喜界島でも「母が娘を海に連れて行き、七日間潮を浴びせると蛇の子が無事に下りた[56]」とある。上記の韓国の伝承は、沖縄や鹿児島の伝承に類似すると言えるが、このように蛇と塩とは深い関連があり、祖母嶽伝説において塩田大夫の「塩田」の場合も、沖縄の浜下りなどの由来から推測すると、蛇と塩との関連から導入された名前である可能性が高い。以上のことから、韓国の諸伝承の始祖誕生の個所は、1)始祖由来型、2)父蛇殺害・始祖由来型、3)地名由来型、4)山参・黄金型、5)蛇の子誕生型、6)蛇の子堕胎型に分類できるものであった。

7.8 蛇の子孫の印

昌寧曺氏の始祖・曺継龍[57]

昌寧曺氏の始祖は曺継龍というが、その理由は次のようである。李氏の家に男の子はなく、一人娘がいた。娘が婚期になったので嫁に行かせようとしたところ、体がだんだん弱くなり、病に倒れた。ある日父が娘を呼んで、「なぜ弱くなったのか」と聞いた。娘は、「去る正月、外に出て庭園の池を眺めていたら、スッポン一匹が池から出て来たので驚いて部屋に戻り、そのまま眠りについたのです。しかし少し不思議な感じがして起きて見たら、ある青衣童子が私の部屋で横になっていたが、すぐ外に出てしまうのでした」と答えた。そこで母からもらった苧環の糸を男の道袍(胴衣)の帯に括って置いた。糸を辿って見ると池に入っていた。その糸を手繰り寄せると、正月に見たスッポンが付いて出てくるのであった。その後、娘は妊娠して男の子を生んだが、膝の下と脇の下に鱗があったので、龍の鱗、それを継ぐという意味で継龍という名

54) 前掲21(1983)『同書』第26巻
55) 前掲21(1983)『同書』第26巻
56) 前掲注9に同じ
57) 前掲注30『同書』1―2

前と曺という名字を国から賜った。

金通精将軍[58)]

秦始王(甄萱王)の話をすれば、昔、あるお金持ちの家に大人しい娘が一人住んでいた。別邸を作り、そこに住ませた。大事な娘なので外から男が出入りできないようにするためであった。ある日娘は父に、「夜寝る時、素姓のわからない坊ちゃんが訪ねてきて、横になってから帰る」と言った。すると父親は絹糸をやりながら、「その人が訪ねてきたら、背中に糸を結びつけるように」と指示する。翌朝、糸の後をつけると、大きな岩の下に入っていた。鉄の道具で土を掘り、岩を片づけて見ると、中にミミズがいた。ミミズを殺し、後で娘は子供を生んだが、大きくなって金通精将軍になる。戦争が起き、その将軍は城を築いて敵を退けった。しかし敵軍が鉄の蓆を利用して攻撃してき、刀で体の鱗が立った隙間のところに刀刺したので金通精将軍は死んだ。

上記の「昌寧曺氏の始祖・曺継龍」は、来訪者が娘のところに通いその娘は妊娠、一人の息子を生んだが、それが昌寧曺氏の始祖・曺継龍であるというものであるが、彼の膝と脇の下には鱗があり、龍の鱗とそれを継ぐという意味で継龍という名前と曺という名字を国から賜ったというものである。次の「金通精将軍」は、ミミズの子孫である、金通精将軍の体には、その印として鱗があったが、将軍になった彼は戦争でそこを狙われ命を失ったというもので、日本の百合若大臣のように鉄人の弱点を語っている。また鉄の道具で土を掘り、ミミズを殺したとあり、これは鉄とミミズ(蛇)とが関連があることを示すものである。中国の弥勒県核桃寨に住む彝族の伝承において、木で作った雌雄の龍を結婚させる儀式が実際に再演されるというが、巫師によればこの儀式は太古の母親を祀るために行われ、当地の彝族の祖にあたる女は、龍との間に祖先を生んだのであり、このため今に至るまで彝族の嬰児の腰には龍の涎の跡があり、足の爪が二つに割れているのは龍が触れた跡であるという[59)]。これは苧環型蛇聟入譚の始祖由来譚が祭りのおいて生きた神話として直接機能するという点で注目すべき伝承である。このように生まれた子供の体に龍の涎の跡があったというのは、上記の韓国の伝承において、生まれた子孫の体に龍の鱗があるという趣向に近似し、日本の『源平盛衰記』と『延慶本』の祖母嶽伝説にも同じ叙述が見られるものであった。だから龍や大蛇(ミミズ)の血筋を引いた子供の体に龍や蛇の跡があるという

58) 前掲注30『同書』9―3
59) 前掲注27に同じ

のは、単に日本だけの問題ではなく、東アジア全体の流れの中でその伝承関係を考える必要があろう。

8. 緒方三郎惟栄始祖神話と緒方三社の原尻滝の川越し祭

先ほど論じたように中国の弥勒県核桃寨に住む彝族の伝承において、木で作った雌雄の龍を結婚させる儀式が実際に再演され、苧環型蛇聟入譚の始祖由来譚が祭りのおいて生きた神話として直接機能するものであった。でははたして日本には、苧環型蛇聟入譚と関わる祭りは存在しないのであろうか。豊後大野市緒方町には、苧環型蛇聟入譚に属する「緒方三郎惟栄始祖神話」と関わって緒方三社の原尻滝の川越し祭が毎年開催される。恐ろしい大蛇の子孫といわれる惟栄はもともと平家側の平資盛の家人であったが、後にはこれに反逆し、源氏側について大宰府に滞在していた平家を攻撃して九州から追い出す。その後、平家陣営を助けていた宇佐八幡宮の宮司である宇佐氏を攻撃するため、宇佐神宮に侵入して火をつけ神宮を焼き払う。伝承によれば惟栄は宇佐神宮に火をつけて焼き払う時、矢が飛んで来て身に当たったが、神の怒りをかい、めりこんだ矢を抜こうとしても抜くことができなかった。それで自領に故郷である豊後大野市の緒方町に帰り、八幡神のための神殿を建立して神を祀ることなどを約束すると、刺さった矢も抜け、負傷した体もきれいに治ったという。豊後大野市に帰ってきた惟栄は宇佐八幡神との約束通り、山(元宮)で矢を射て八幡神の居場所を探したが、最初の矢が落ちたところに一宮八幡社、第二の矢が落ちたところに二宮八幡社、第三の矢が落ちたところに三宮八幡社を勧請したという。一宮八幡社の祭神は応神天皇の父である仲哀天皇、二宮八幡社の祭神は応神天皇、三宮八幡社の祭神は応神天皇の母・神功皇后が祀られており、今も豊後大野市緒方町にはこれらの神宮が伝わっている。毎年十一月中旬の土曜日と日曜日にこれら八幡神の合同祭が緒方町で開催されるが、一年に一度だけ、三宮八幡社にいる母神が子神に逢うために山をおり、息子のいる二宮八幡宮で一夜を過ごすという。母神のいる三宮八幡宮から息子の祀られている二宮八幡宮までは約二.三キロメートル離れており、そこへ行くためには原尻の滝(川)を渡る必要がある。神輿に母神を乗せ冷たい川を渡る青年たちによる「緒方三社川越祭」が緒方町で今でも盛大に開催されている60)。

---

60) 拙稿(2007.10)「大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国―その伝承地を訪ねて―」『ポ

以上のように緒方三社の創建は源平合戦と関わり、惟栄が宇佐神宮を焼き払い、神の怒りによる緒方三社の造営から始まったことになっているが定かではない。『豊後国誌』によれば「治承二年八月、緒方惟栄この三祠を建つると云ふ[61]」とあり、一一八七年に緒方三郎惟栄がこの緒方三社を創建したことになっている。筆者は「緒方三社川越祭」には、苧環型蛇聟入譚に属する緒方三郎惟栄の始祖神話や火遠理命(山幸彦)と豊玉姫命の神婚説話が投影されており、祭りはそれの再演だと考える。緒方三郎惟栄氏祖神話に登場する花の御本姫は三宮に祀られている神功皇后、大蛇は一宮の仲哀天皇、その間の蛇の子は二宮の応神天皇(八幡神)にそれぞれ対応する。前述したように緒方三郎惟栄始祖神話は、神武天皇の祖母である豊玉姫命や兄の彦五瀬命神話と結び付いて伝承されるものであった。そうなると、三宮の神功皇后は豊玉姫命、一宮の仲哀天皇は火遠理命(山幸彦)、二宮の応神天皇は鵜葺草不合命となり、海宮で結婚をして身ごもった豊玉姫命が子供を産むために川(海宮)を渡って火遠理命のいる地上を訪問し、海辺で天孫の鵜葺草不合命を産む。そして見るなという出産の禁忌が破られ、怒って海に帰ってしまう。そこで海と陸との断絶が始まったと記紀神話は記しているが、一年に一回母神が我が子神に会いに川を渡る「緒方三社川越祭」は、こうした神話が実際に祭という形でして機能し、伝承されてきたものではないだろうか。では「緒方三社川越祭」を始めた人は誰なのか問題になるが、神武天皇の祖母である豊玉姫命信仰を持ち込み、自らの祖先を嫗嶽(祖母嶽)明神として信仰してきた豊後大神氏であろう。渡辺澄夫氏『源平の雄　緒方三郎惟栄[62]』によれば、祖母山から東方への豊・日境界の山々には豊富な銅やその他の鉱山が続くという。緒方氏を祖とした大神氏一族はおそらく銅・鉄・水銀(朱)などの金属技術を持った集団であった[63]。また豊後大神氏は、嫗嶽明神を氏祖神として水の支配者となり、緒方川、緒方盆地を神話により正当化した。さらに彼らは緒方川だけではなく、大野川、大分川、五ヶ瀬川、豊後水道に渡る広範囲の勢力圏を形成したものと思われる[64]。『源平盛衰記』や『平家物語』では大蛇の正体について、嫗嶽明神や高知尾明神の垂迹と記すように、祖母山を境に豊後国と日向国に跨って暮らす豊後大神氏はこうした祭りを通じて自らの血筋が天皇家と繋がっている神聖な存在であることを強く主張し、こうした「緒方三社川越祭」を通じて祖母山を中心とする当地やその周辺地域の結束を図りながらその統治基盤を確立させたものと考える。

リグロシア』第13巻
61) 前掲注14に同じ
62) 前掲注5に同じ
63) 富来隆氏前掲注1に同じ
64) 前掲注5に同じ

9. おわりに

従来学界においての苧環型蛇聟入譚についての研究は、『古事記』収載の「三輪山神婚説話」を中心に考察が行われ、豊後や日向地方を背景にしている「祖母嶽伝説」に中心を置いて考察した論考は皆無に近いものであった。そこで本稿では、豊後国と日向国を舞台とする、『源平盛衰記』や『平家物語』収載のいわゆる、「祖母嶽伝説」と韓国の「苧環型蛇聟入譚(夜来者説話)」との比較を通じて両伝承の特色を鉄文化の視点から論じてみた。また従来の研究では日本には卵生型氏族神話や卵生神話が縁遠いものとされてきたが、前述のように民間伝承の苧環型蛇聟入譚のなかに密かに伝承されるものであった。そこで以上述べたことを簡単にまとめればおよそ次のようである。

(一)『源平盛衰記』『平家物語』の祖母嶽伝説では、中央で編纂された『古事記』や『日本書紀』などと違って、豊後国や日向国を舞台として展開されているのが特徴であった。特に祖母嶽伝説は、『古事記』にはない、日本の昔話に多く存在する「立ち聞き型」に近い叙述が見られており、『古事記』の三輪山神婚説話とその趣向を異にしている。そこで両者は原拠とした説話が必ず同一のものであるとは言いにくく、大和の神話をそのまま、豊後国に移植され再現したとも考えにくい。また日本の「立ち聞き型」には、節句の由来と関わって、子種を否定する伝承が多く見られ日本的特徴といえるが、この話型はすでに韓国の伝承にも見られるもので中国からの直接影響というよりは朝鮮半島との関連から論じる必要性が出てきた。

(二)『源平盛衰記』では、「目は銅の鈴を張ったようで口は紅を含んだよう」と生まれた子供については、異名を「皷童」、または「皷大弥太」、「銅大太」(大神系図)とし、『延慶本』では大太、赤雁大太となっており、鳥の名を付しているのが特徴であった。これは赤雁と鉄との関連から考えるべきであり、緒方氏をその祖とした大神氏は、製鉄文化を持った金属技術集団であることが考えられるものであった。

(三)『源平盛衰記』と『平家物語』では、夜の訪問者の服装が「水色の狩衣」、韓国では「青色」であった。水色とは、普通無色透明であるが、池や湖などの色のように、緑みのある青色である。この青色とは酸化した鉄の色を表すこともあり、夜訪問してくる男がおそらく鉄文化と関連する人物であることが想定できるものであった。

(四) 鎌倉時代の『平家物語』などに見える、大神氏の祖神としての嫗嶽山の嫗嶽大明神が江戸時代に入り、彦五瀬命の祖母である豊玉姫命信仰と結び付き、祖母嶽や祖母嶽明神(大

蛇の霊)と同一視されるようになったことが推測される。こうした豊玉姫命信仰を持ち込んだのは豊後大神氏であり、自らの血筋が天皇家と繋がる神聖で貴い存在であることを主張することによって、当地の統治基盤を確立させようとしたのであろう。

(五)『古事記』の三輪山神婚説話や『源平盛衰記』など収載の祖母嶽神話には、卵生要素が見られないし、学界では従来、日本には卵生氏族神話が縁遠いものとされてきたが、苧環型蛇聟入譚の卵生型始祖神話や卵生説話の形として多数伝承されているので、従来の学界の説は再考する必要がある。また卵生要素のない文献の苧環型蛇聟入譚より卵生型始祖神話の方が古いことが考えられ、文献に記されるときに編者の意向によって卵生要素が意図的に外された可能性が考えられる。

(六) 従来韓国の学界では、後百済国の始祖王の甄萱に山神の化身と言える虎が来て彼に乳を飲ませて育てたと記す『三国遺事』の記録について、虎に対する韓国人の固有信仰として捉える傾向が強かったといえるが、虎が乳を飲ませる趣向はすでに中国の雲南省の苧環型蛇聟入譚に見えるので、甄萱伝説への直接的な影響関係も検討する必要性が生じた。

(七) 鉄神の象徴ともいえる大蛇の訪問と、その大蛇に糸を通した針を刺して置き、その糸をつける大蛇の居住地が大岩であったというこのサイクルを苧環型蛇聟入神話と関連して、どのように理解すれば良いのかであるが、韓国の古墳では、鉄生産遺跡にも関わらず、糸を紡ぐときの紡錘車が大量に出土されている。紡錘車には鉄製のものもあり、鉄製品とともに服(機織りの巫女)と関連する紡錘車が祭祀対象物として使われた可能性が高く、苧環型蛇聟入譚の原風景は、おそらく巫女が蛇神であり鉄の神を迎える祭儀において生きた神話として機能したものにあったと考えられる。

(八) 中国の弥勒県核桃寨に住む彝族の伝承において、木で作った雌雄の龍を結婚させる儀式が実際に再演され、苧環型蛇聟入譚の始祖由来譚が儀礼と結び付いて伝承されるように、豊後大野市に今も伝わる「緒方三社川越祭」は、豊後大神氏の始祖伝承や豊玉姫命神話の神婚説話の再演であり、実際に祭という形で受け継がれてきたものであったろう。豊後大神氏はこうした祭りを通じて自らの血筋が天皇家と繋がっている神聖な存在であることを強く主張し、「緒方三社川越祭」を通じて祖母山を中心とする当地やその周辺地域の結束を図りながらその統治基盤を確立させたものと考える。

最後に韓国忠清南道燕岐郡西面双流里のビアム寺の「ソーリ山伝説[65]」を紹介して終わりたい。昔、スーリ山(ソーリ山)の麓に一人の娘が住んでいた。ところが婚期を迎え、結婚

65) 張徳順(1978)『韓国説話文学研究』ソウル大出版社

する年頃になった時、素姓の知らない男が夜毎訪ねて来て泊って帰るのであった。これを不思議に思った娘は、ある日の夜、訪ねてきた男の衣の裾に糸を通した針を刺して置いた。翌朝、明るくなると彼女は糸を辿って行ってみた。すると糸はソーリ山の頂上の近くに至った。そこには大きな蛇が死んでいた。その後、女は男の子を生んだが、貴公子になり、村の神になったといわれる。ここで寺の名前になった「ビアム」とは、蛇の意味である。今はソーリ山と呼び、高さは三八三メートルであるが、日本の祖母山の古名である「曾褒里能耶麻66)」を連想させる。この山は神婚神話を伝える三輪山のような地勢を持ち、山の両側から川が流れ、双流里という村で合流して神市としての風水を持つ。その蛇寺とその周辺からは七世紀の仏像が七体も発見された。また昔、この地域は鉄の産地であり、その周辺地域の忠州などの錦江流域は、百済時代初期の鉄の産地でもあり、そこは『日本書紀』巻九・神功皇后五二年条に見える、谷那鉄山の地とも言われている。また、甄萱伝説の伝承地には、大分の宇田姫社の蛇が通ったという洞窟の穴のような、彼の出生と関連する洞窟が存在する。彼が出生した場所は、韓国慶尚北道の尚州で、その尚州にはBC五八年に沙伐国という国が存在した。この沙伐国は鉄を生産して倭などに輸出した国とも伝わる。

このように苧環型蛇聟入譚の伝承地である祖母山や三輪山と韓国のビアム寺(蛇寺)のソーリ山などは、山を背景にして両側から川が流れ、合流する神市としての風水を持ち、またそこは古来より鉄の産地でもあり、苧環型蛇聟入譚の伝承地でもあった。

【参考文献】

福田晃・金賛會・百田弥栄子(2011)『鉄文化を拓く炭焼長者』三弥井書店
福田晃(1984)「昔話の発生と伝播」(『日本昔話研究集成二』名著出版)
金賛會(2001)『本地物語の比較研究―日本と韓国の伝承から―』三弥井書店
_____(2007)「大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国―その伝承地を訪ねて―」『ポリグロシア』第13巻
渡辺澄夫(1981)『源平の雄　緒方三郎惟栄』第一法規出版株式会社
富来隆「大神氏の始祖惟基をあかがりの大弥太ということについて」(一)~(三)『佐伯史談』
魯成煥他(1985)「古事記三輪山伝説の一考察―韓日移動関係を中心に―」『日語日文学研究』6巻1号 韓国日語日文学会
真弓常忠(1981)『日本古代祭祀と鉄』学生社
関敬吾(1978)『日本昔話大成　第二巻　本格昔話一』角川書店
稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編(1994)『日本昔話事典』弘文堂
三品彰英(1971)『三品彰英論文集　第三巻』平凡社

66)『日本書紀』巻第二の「神代　第九段」に「添山、此をば曾褒里能耶麻といふ」とある。

稲田浩二(1980)『日本昔話通観 』第24巻 同朋舎出版
芹原孝守(2003)「雲南彝族の三輪山型説話」『比較民俗学会報』第24巻 第4号(通巻第118号)
韓國精神文化研究院語文研究室編『韓國口碑文學大系』
金和経 (1987)『韓国説話の研究』嶺南大学出版部
李ジヨン(2008)「夜来者説話との関係から見た火種と童参ー火の信仰に関する比較民俗学を兼ねてー」『東アジア古代学』第18輯 アジア古代学会
金均泰(2004)「韓中日夜来者型説話の比較研究」『比較民俗学』第26号 比較民俗学会

논문투고일 : 2015년 03월 10일
심사개시일 : 2015년 03월 20일
1차 수정일 : 2015년 04월 08일
2차 수정일 : 2015년 04월 14일
게재확정일 : 2015년 04월 20일

〈要旨〉

苧環型蛇婿入譚の祖母嶽伝説と韓国

－鉄文化の視点から－

大分県豊後大野市には豊後国武将・緒方三郎惟栄の始祖誕生を叙述する「祖母嶽伝説」が存在する。この伝説は、『古事記』に見える苧環型蛇聟入譚に属する三輪山神婚説話と類似するもので、韓国の古代国の一つ、後百済国の始祖由来を叙述する「甄萱伝説」ともきわめて近似している。従来学界での苧環型蛇聟入譚についての研究は、『古事記』収載の三輪山神婚説話を中心に考察が行われ、豊後や日向地方を背景にしている「祖母嶽伝説」に中心を置いて考察した論考は皆無に近いといえる。そこで本稿では、豊後国と日向国を舞台とする、『源平盛衰記』や『平家物語』収載のいわゆる、「祖母嶽伝説」に焦点をあてて検討を試みた。特にその祖母嶽伝説が隣の国・韓国ではどのように展開されているのか、豊後国や日向国の祖母嶽伝説や民間伝承の苧環型蛇聟入譚との比較を通して、両伝承の特質を鉄文化の視点から明らかにしている。また従来、学界では日本には卵生型氏族神話や卵生神話が縁遠いものとされてきたが、民間伝承の苧環型蛇聟入譚のなかに密かに伝承されているのもはじめて指摘している。さらに後百済国の始祖王の甄萱に「山の虎が来て乳を飲ませて育てた」と記す『三国遺事』の記録についても従来の学界では、虎に対する韓国人の固有信仰として捉える傾向が強かったが、この趣向はすでに中国の雲南省の苧環型蛇聟入譚に見えるので、甄萱伝説への直接的な影響関係も検討する必要性が出てきた。

Korea And The Odamakigata-Hebimukoiri Tale Of The Sobotake Legend

－From The Perspective Of The Ironware Culture－

In the city of Bungo-Ono, Oita prefecture, there exists a Sobotake legend that describes the birth of the forefather of Ogatasaburokoreyoshi, a general of a country called Bungo. This legend not only draws parallels to the Mount Miwa-Shikon tale (A tale about a marriage between a god and a human) which is part of Odamakigata-Hebimukoiri(A tale about the use of a yarn ball to reveal a snake as a son-in-law) as it is found in Kojiki, it is also highly congruent with the Kyonhwon legend which depicts the advent of the Post-Baekje period－one of the ancient kingdoms of Korea. In the academia of the past, research on the Odamakigata-Hebimukoiri tale focused merely on the Mount Miwa legend. Therefore, a focus on the Sobotake legend set in Bungo and Hyuga is unprecedented. As such, this paper attempts to provide some first thoughts and perspectives on the Sabotake legend with Bungo and Hyuga at its center, which thus includes Genpejosuiki and Heike monogatari. This paper particularly aims to investigate how the Sabotake legend is depicted in neighboring Korea. Through a comparison of the Sabotake legend (based on Bungo and Hyuga) and Odamakigata-Hebimukoiri tale, the characterization of both is undertaken from the perspective of the ironware culture. Furthermore, according to past scholarship, the oviparity legend and the legend of oviparous clans were considered unrelated. This paper is the first of its kind to point out the implicit message behind the Odamakigata-Hebimukoiri tale. In addition, according to existing records of Samgukyusa which depicts Kyonhwon, the first king of the Post-Baekje period, as raised and fed by a tiger of the mountains, academia in the past had a strong tendency to focus on the special meanings of tigers to Koreans. However, such inclination make the legend strongly resemble the Odamakigata-Hebimukoiri tale from Unnansho, China. There is therefore a need to re-investigate the direct impact of the Kyonhwon legend.